
アンシェ・アンシール = アルシカのラジオ

J . I . A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンシエ・アンシールⅡアルシカのラジオ

【Nコード】

N7248Y

【作者名】

J・I・A

【あらすじ】

魔法文明の発達した異世界、機械の羽を手に入れたラジオが好きな女の子の話。
星空文庫で掲載中です。

当時、私の住んでいる工場町で密かなブームを呼んでいるラジオ番組があつた。

昼食の時間になると、地域住民は誰もが決まってこの局にチャンネルをあわせた。お椀形の湾岸一帯が巨大スピーカーと化して、地中海を飛行中の飛空艇にまで彼の声は聞こえていたという。

「みなさんこんにちはリビング・イン・セオフィールドのお時間がやってまいりました、今日は記録的な大雪の中からお届けしております。」

こちらの窓の外は雪景色、旅行者のみなさん、今日は写真を撮つても地中海には見えませんのでご容赦を、越冬に来たシュピールたちも水の冷たさに凍えています。

全国推定一万人のバーリオ（バーリヤ人）のみなさん、防寒対策はお済みですか？

鱗の生えている方は道端でうつかり冬眠しないように。

毛の生えている方は道端でうつかりはしゃぎすぎないように。

また、どちらも生えていない方はうつかり風邪を引かないようにご注意ください。

本日も楽しい音楽と昼食のひと時を、DJコバタとお過ごしください、では後ほど」

DJコバタさんの声が流れはじめると、セオフィールドの犬たちが尻尾を振ってはしゃぎだす。バーリオの彼は動物達に好かれる特別な声を持っていた。

そう、これはバーリオ、獣人による獣人のためのラジオ番組だ。ちっぽけな工場町で個人的に始められたのが、色んな局が放送しは

じめ、今では全国にまで流れていた。ちよっぴり普通じゃないのがウケたのか、人間の中にもコアなファンがあらわれ始めているそうだ。

このラジオが収録されているのはジペンゼ州、セオフィールド市のとある歯車製造工場の奥だった。もともと人間の土地だった東部アーディナル大陸のど真ん中にありながら、工員の全員が西部の獣人たちが構成されているという不思議な工場だ。

私、アンシエ・アンシール「アルシカはそんな工場に住み込みをしていた女の子だった。身長一四七センチ、趣味は機械いじり。獣人たちの間を駆け回って仕事のお手伝いをしたり、社員食堂でDJコバタさんの昼食を包んで、放送局に持って行くのが日課だった。

その社員食堂はとにかく倉庫のように広くて、いつも動物くさくて賑やかで、さしずめ動物園だった。彼らの食事のマナーは至ってシンプルで覚えやすい、『人の食物は横取りしないこと！』だったの一行だ。獣人の中にはこのたった一行の命令も覚えられない、という種族中にはいるので、壁にでかかどと張り紙がしてあった。チョコ・ペーストを毛むくじやらの手ですくい舐め、ナイフのような牙をかちやかちやならし、いつも机の下には食べかすと動物の毛が固まったものが散らばっていた。

私はそんな場所をくぐり抜けてゆかなければならない。本日のお弁当を包んでもらったら、誰かに横取りされないうちにすばやく社員食堂を出なくてはならなかった。裏手のドアを開けてすぐ正面、山際の広場に設置されたLIS放送局が目に入る。

鉄骨が組み合わさった塔に錆びの浮いた「LIS放送局」の看板があつて、その天辺に、「隙間風？ 防音？ なにそれ、おいしいの？」と言った風情のボロ小屋があつて、その上に台風が来たらあつてなく飛んでいきそうで、これがなかなか飛んでいかないしぶといアンテナが乗っかっている。これがブースだと聞いたら人間のDJはみんなぶっ飛ぶだろう。

終戦から十五年目、アーディナル復興期真っ只中の九二三年。獣

人がこの地に移民として流れてきて間もない頃、この工場を経営していたスクルフ族の兄弟が独力で建てた《魔力通信塔》だった。その頃、遠い地からやってきた獣人が人間の社会になじむには相当な時間がかかり、多くの社会問題を抱えていた。そこで地域に住む獣人が悩みを相談できる専用ラジオ番組を制作しよう、という着想からすべては始まったらしい。

出来栄えはともかく、その心意気が私は好きだった。恥ずかしくてなかなか友達には見せられないけれど、ぶっちゃけ世界一の建物だと思っていた。

食堂から持ってきたお弁当箱を頭の上に乗つけて、異様に高い段差（一段がおへそぐらいまである）をよいしょよいしょの掛け声を出して昇っていった。

水蒸気で曇ったガラスの表面にぺたつと額を貼り付けると、ひんやりと気持ちのいいガラスの向こうに、音楽にあわせて右に左に腰を振る人影が見える。

人間専用のヘッドホンを頭上に掲げていて、その脇から白い狼の耳がびよこんと生えている。体の構造は比較的人間とよく似ているけれど、ヘッドホンは両手で押さえていなければならないのでいつも使いづらそうだ。それでも本人は至って陽気に白い尻尾をふりふり振っていた。

窓を叩くと、DJコバタさんの狼の顔が振り返る。

雪のように白くてふかふかの毛、まっすぐ私を見つめ返す紺碧の両目。私はこの狼顔のDJの為にとびつきりの笑顔を見せた。誰にでも見せる訳じゃない。

DJコバタさんは軽く手を挙げて挨拶すると、操作盤のつまみを下ろして曲のボリュームを下げ、机の上のマイクにピンク色の鼻面を近づけた。

「ただいまのリクエストをくださった防具の町ウッドロックのRNラジオ・ネーム強化武装？」さんからのメッセージを頂いております。

「こんにちはDJコバタさん、最近はよく冷えますね。（冷えます

ねえ)

私たちマツシユ族(トカゲの獣人です)は寒くなると動きが鈍くなるので、朝起きるのがとても辛いです。先週は急に気温が氷点下になったせいもあって、家に帰り着くまでに道端で冬眠をしなければならなかった仲間が多いと聞きます。

冬期休暇まであとほんの少し。寒い日は家で一日中布団に包まって、ネコと遊んで暖まるぐうたらな毎日を送っています。DJコバタさんはこの冬をどのように過ごす予定でしょうか? よかったらぜひ聞かせてください!」

そうなんですよねー、爬虫類系の方は特に冬の寒さが問題なんですよねー。働く場所によっては冬期休暇をずらす事も出来ない場合が多いですし。ウチでは特に冷える日は早引きしもらったりしてますけど、それでも心配なので夜更けに道端で倒れていないかパトロールしたりしていますね。

ラジオではお見せで来ませんが、強化武装?さんからは可愛いネコさんの写真まで送って頂きました。なんとまあ、お腹がでっぷりとしていかにも美味そ……いやいや、齒ごたえというか、喉ごし、とにかく、飼い主の愛情がいっぱい詰まってそんな可愛いネコさんですわね……じゅるり」

最後に彼がよだれを拭いたのは、太ったネコのせいではなかった。たぶん私のせいだ。

コバタさんは放送を続けながらも、窓の外で私が見せびらかしている本日のお弁当をじいっと見ていた。ズボンから突き出した尻尾をいまにも飛んでいきそうな勢いで振っていた。

「そう言えば、ウチは兄がうるさいからペットは飼ってはいないんですが、《ジトノ》の女の子が一人いるんですね。これがやんちゃな子でしてねー。構って欲しい盛りなんじゃないかな。いま、窓の外にその子が見えていますけど。工員達に付きまとって、いつもイタズラばかりしてるんですよー」

「イタズラじゃない、お手伝いしてるの!」

私が入った込みを入れても、トークを続けているコバタさんの目は、もはや私が差し出したお弁当箱のカラフルな色彩しか映していないみたいだった。

調子に乗った私はミニトマトを摘み上げて、顔上からゆっくりと口の中に落とし込む素振りをしてみせた。

「ジトーノは少数民族なのでご存じない方も多いと思います。私もあまり知り合いが居ないんですけど、基本的にアーディナル人によく似ていますね。」

目立った体毛は、髪ぐらいしかありません。ゴールドで額の髪が長くて、いつも両目が隠れています。寒い地方にあんな感じの毛むくじやらかな犬がいますね。そいつの背中に羽が生えた感じだと思ってください。

今も私のお弁当箱を見せびらかして、何か不穏な動きをしていますね。……ちよつと脱線していいですか。私の本日のおかずを中継いたしますと、野菜炒めに先ほどまで三つ子だった一つ子のミニトマト、うーん可哀想に。近海で採れたクルマエビが丸のまま五匹、今にも襲われそうな恐怖に震えながら入っています。

ベーコンエッグは六枚のサラミを惜しげもなく使った最高の出来栄え、黒胡椒がふりかけられていて、見るだけで鼻腔をつんつと刺激されそうです。うーん、刺激されたい。

それを、うちのアンシエちゃんは？ どうするの？ ……あー、食べるの。へー、食べちゃうんだ。そんなにがつつり？ いっっちゃうの。好き嫌いしちゃうダメよ。自身だけ綺麗に残すとかダメよ。

クルマエビはおいといてね。そうそう、それ。おじさん大好物だから。あ……あ……あ……あー、でもやっぱり食べちゃうんだ。へえー。困ったなあ、困った食いしんぼさんだなあ、ウチのアンシエちゃんは。……まー、ウチで暖を取る方法と言えば、やっぱりこれでしょうな」

DJコバタさんはマイクを引つ掴んでぶわつと毛を膨らませ、打って変わって獰猛な怒鳴り声をあげた。

「全工員に告ぐ！ アンシエを捕まえた奴には賞金四十エルシャル
ンだ！ 手段は問わない！ 多少泣いていても気にするな！ かか
れーっ！」

彼が仲間を呼ぶ瞬間、私はより一層目を輝かせて喜んでいたそう
だ。……そんなに意地が悪かった覚えはないんだけどな？

私は怒ったDJコバタさんも格好よくて好きだった。彼が遠吠え
をすると、デイーグ湾一帯の犬達が遠吠えをはじめ、羊や馬は本能
的な恐怖を覚えて震え上がった。空を見上げるとカモメたちがここ
からともなく群れ集い、万華鏡を覗いたような鮮やかな編隊飛行を
行っていた。

欄干から塔の下を見下ろすと、食堂の両開きの扉が開き、うおー
という唸り声をあげて大小さまざまな獣人たちが溢れてくる。みん
な顔なじみの工員たちだった。小柄な体を生かして早くも階段を駆
け上ってくるネズミやイタチの工員たちもいて、私はすぐに逃げ場
を失った。

けれども慌てる必要はなかった。なぜなら、私は飛べるのだ。手
すりに両足をかけて、バランスを保ちながら立つと、ちょうど雪の
降る広場を埋め尽くす工員たちが、毛むくじやらの手を挙げて、B
級映画のゾンビの群れさながらに私を待ち構えていた。

工員たちの平均身長は二メートル、向こうの屋根までおよそ五十
メートル、《ジトーノ（有翼人）》の私にはなんと言うことの無い
距離だ。背中に生えた短めの翼をめいっばい広げて、私は一気に
電波塔から飛び立った。

*

鬼ごっここの終わりはとてもカツコ悪くて、びしょ濡れで、惨めな
ものだった。

調子に乗っていた私は工員達の頭上すれすれを飛んで、食堂の屋
根にある風見鶏にしがみついた。風見鶏ごと三六〇度ぐるんと一

回転して、今度は屋根の端から下を覗き込んだ瞬間、とつぜん足場の雪が雪崩を起こして、私はまっさかさまに落っこちたのだった。

工員達の騒ぎ声は一瞬で笑い声に変わった。誰か笑う暇があったら私を助けてくれてもよかったのに、と苦々しく思うけれど、そのとき食堂の近くに居たのは寒くて出遅れていたトカゲやカエルの獣人たちがばかりで、誰も雪の中に手を突っ込めなかったのだ。

数分後、雪の中から私を引っ張り出してくれたのは、結局コバタさんだった。

DJコバタさんの背中に負われながら、私は何度も「ごめんなさい」と繰り返し呟いていた。

呆れているのか怒っているのか分からないため息をついて、コバタさんは私を事務所まで連れて行ってくれた。

「帰るぞ。風邪を引いたら大変だ」

多分ひかないと思うのだけれど、コバタさんは私を氣遣って家まで送ってくれた。こんな風にして、LISはしばしば中断した。

大切な番組が中断しても、コバタさんは何も言わなかった。「もう謝らなくていい」とも、「二度とするな」とも。

忠告されたところでそれに懲りる自信はなかったのだけれど、いつものコバタさんと少し様子が違った風に思えて、私は素直に謝るしかなかった。

「……ごめん」

心の中で何かを決意しているような、そんな気がしたのだ。

「お前がここに現れたのも、こんな雪の降る珍しい日だったな」

DJコバタさんはそう言った。私は急に不安になって、コバタさんの背中を握り締めていた。

十三年前、今日みたいな雪の日に、セオフィールドの建物と建物の間に落っこちていたのが私だ。パトロール中のDJコバタさんが私の匂いをかぎつけて、発見してくれた。正確な誕生日はわからないけど、以来その冬の日が私の誕生日という事になっている。

私の羽はDJコバタさんに拾われた時点で半分ほど無くなってい

た。肩甲骨あたりからにゅっと突き出した白い羽は、どうにかこうにか羽ばたけるといった程度にちびていた。

当然ながら、飛ぶのはかなりへたっぴだった。ジトーノは北部の高山地帯に住まう少数民族で、私はそれまで他のジトーノの飛行を見た事がなかったから容易には気づかなかったのだけど、実際の彼らは本当に優雅に空を舞っていた。

成人のジトーノの翼は一枚で体を覆い隠せるほど大きなものだ。二の腕ほどの長さしかない翼では、うまく飛ぶことはできない。たとえばさつき落下した時のように、空中でくるっと身を翻して着地することができない。私は工場内で何度も大きな飛行事故を起こしては、工員の人たちに迷惑をかけまくっていた。

私が引き起こした今回の騒動は一瞬で収まった。けれど、その話は工場のもう一人の経営者の耳にも入ってしまった。ラジオで大々的に騒いでいたのだから当然だろう。

私が事務所のソファでうとうととしている頃、マルハトさんが帰ってきて、その晩、DJコバタさんとちよつとした争いを起こしていた。

マルハトさんは同じ狼の頭を持っているけれど、コバタさんとは対照的に全身の毛が真っ黒で、目つきも鋭い。しっかり者の印象を受ける人だった。事務所のドアを開けた途端に彼は怒鳴った。

「また飛んだのか？」マルハトさんは体をぶるると震わせて、コートの肩に積もった雪を落とした。「コバタ、お前がすっかり監督しておかないからいけないんだ」

外回りを受け持っているマルハトさんは、最近は滅多に工場に帰っていないかった。私に関する事は現場監督のDJコバタさんにすべて押し付けていた。それでも私が飛行事故を起こしたと聞きたびに出張から戻ってきては、コバタさんを叱り付けるのだった。

「兄さん、仕方ないんだよ。やっぱりあいつはジトーノなんだ。飛ぶのが本能みたいなものだよ、無理に押さえつけてはいけない」

「またお前はそうやって責任逃れをする気か。本能は押さえつけて当然のものだろうが。いいか、これ以上アンシエに無茶な飛行をさせるな。これは業務命令だ」

「たまにはあいつを好きなように飛ばしてやった方がいい。ディーグ湾にでも連れて行ってやろう」

「たまには？ ディーグ湾だと？」

マルハトさんは、バリーオ特有の四本しかない指を彼に向け、きつく言いつけた。

「絶対に飛ばすな！ 工場内の事故ならまだ目をつぶっていられるが、ディーグ湾ではアーディナル中の会社の飛空艇テスト飛行も行われているんだぞ。もし万が一、そいつらとの衝突事故などあつてみる」

マルハトさんは帽子とコートを事務所の片隅にかけて、いつものようにふんと鼻を鳴らしてデスクに着く。

「その時は、我々も苦情を聞かされるだけではすまんぞ」

そして、この話はこれで終わりとはかりに、メガネをかけて書類を広げ始めた。この人はいつもこんな感じなのだ。強引で、正論が好きで。

羽ペンでさらさらと書面を書きしたためるマルハトさんの前に立ち尽くして、あきらめ切れない様子のDJコバタさんは、肩をすくめて呼びかけた。

「兄さん、けどこのままじゃ何も変わらないって。考えたんだが、あいつにも同じ種族の友達が必要なんじゃないか？ ジトーノにはジトーノの、同じ種族の連中にしか分からないルールがあるはずだ」話を聞かずに席を立とうとするマルハトさんの前に、DJコバタさんは立ちふさがった。

「今後は私たちよりも、彼らから色んな物を学ばせないと。そのためには、アンシエが普通のジトーノと同じように、空を飛べるようになる必要があると思うんだ」

「飛ぶだって……？」マルハトさんは鼻の頭にぎゅっとしわを寄せ

た。「馬鹿馬鹿しい、これ以上危険を増やしてどうする？」

DJコバタさんは、信じられない事を聞いたといった風に目を丸くしていた。

「……飛ぶのが、危険だった？」

マルハトさんの目は、しばらくの間紙面から離れて弟の鼻っ面に注がれていた。

失言だと思ったのか、マルハトさんは渋い顔をして、すぐに視線を逸らしてどこかに移動してしまう。DJコバタさんはしつこく彼の後を追いかけた。

「おい何を言っているんだ、兄さん、昔の兄さんはそんなことを言わなかったはずだ」

「もういい、勝手にしろ、あいつを拾ったのはお前だ、最後までお前が責任を取ればいい」

そう言って、マルハトさんは事務所から出て行ってしまった。

「待ってくれ、兄さんはまだあの事故を引きずっているのか？」

ドアの向こうに去ってしまったマルハトさんを追いかけて、DJコバタさんは声を張り上げた。

「私だつて飛ぶのは恐い、失敗したときの事を考えない訳ではないさ。けれど兄さん、一度でいいからあの子が飛ぶ姿を見てみるよ。

アンシエは空を飛ぶとき、一番綺麗な目をしている。彼女は飛ぶ瞬間、何も恐れてはいないんだ。あの子にとって空を飛ぶ事は、鳥が空を飛ぶのと同じくらい自然な事なんだよ。兄さん、それが自然なんだ。私たちが昔の技術を取り戻せば、あの子を自由に飛べる体にしてやれるんじゃないのか！」

暗闇に溶けてしまったマルハトさんから返事はなかったけれど、DJコバタさんはずっと声を張り上げていた。犬の遠吠えがその声に何重にもかさなっていった。

「兄さん、もう一度空に挑戦しよう！昔、飛空艇を作った頃のように！これは他の誰にもできない、私たちがするべき仕事だ！」

私がここに来る直前まで、つまりは十三年前まで、この工場は飛空艇の造船工場だったのだと聞いた。

まだ飛空艇開発が最盛期を迎えていた時代だ。造船工場があぶくのように生まれては消え、有能な技師は競うように積載量や速さの限界を追求し、時代の最先端を行く飛行技術が次々と開発されてきた。

しかし、それもたった一度の悲劇でひっくり返り、今はすっかり変わってしまったのだ。

獣人の工員たちの間で、今も語り草になっている技術者が居る。《ドック?世》という、獣人としてアーディナル大陸で大きな成功を収めた最初の人物だ。

新聞や雑誌に彼の開発した新技術が公開されるたびに、幼かった頃のスクルフ兄弟は目を輝かせて喜んでいたという。私に当時の記憶はないけれど、古株の工員たちはみんな懐かしそうに教えてくれた。

けれども、飛空艇の最盛期を終わらせたのもそのドック?世だった。着想に十年、開発に二年をかけ、満を持して空に浮かばせた巨大飛空艇《パール号》、それが都市上空を飛行する途中、突然の強風に煽られて地上二百メートルの《霞の塔》に衝突し、乗船していた開発者ドック?世を含め、千人近くの乗客が命を落とす大事故になったのだ。

DJコバタさんとマルハトさんはそこに居た。視察の為に現場を訪れていて、有名な飛空艇事故の瞬間を目の当たりにしてしまったという。

この事故の後、マルハトさんは突然飛空艇の開発をやめて下請け業に専念してしまった。その時もDJコバタさんとはさんざん口論があったみたいだけど、結局はコバタさんの方が折れたそう。それは決して感情的なものではなくて、誰よりも客観的に現状を見極

めだがゆえの結論だったのだ。

ドック？世の失敗で、飛空艇そのものに対する世間の信頼が大きく揺らぎ始めていた。

受注が急激に少なくなっていたのは当然、さらにその後、飛空艇の開発には政府から厳重な規制が敷かれるようになって、一隻の開発にかかるコストが倍以上に膨んでしまったのだ。

小規模な造船会社ではとても立ち行くことができず、ディーグ湾に無数にあった飛空艇開発工場は次々と閉鎖を余儀なくされていったのだ。

マルハトさんはこの経営危機の到来をすぐさま察知した経営者の一人で、工場を部品製造業に切り替えることでなんとか生きながらえてきた。

マルハトさんはいつだって理性的だった。だからこそ、今もこうしてこの工場が存続しているのだと言えた。

「けれども、やっぱりあの事故を見た時のショックがないわけじゃなかったんだな……」

DJコバタさんは受話器をぶら下げ、うな垂れてそう呟いた。

片っ端から営業先に電話を試みたけれど、あの雪の日以来、マルハトさんが知り合いの営業先に向かった形跡はなかった。自宅にも工場にも帰ってきておらず、まったく連絡が取れなくなっていた。兄弟は二人で一人だった。どんな時も理性的なマルハトさんが隣に居たから、DJコバタさんは後ろを任せて頑張れたはずだ。それがこんな形で兄弟が分かれてしまって、この先工場はどうなっていくのだろうか。

なんて感傷に浸ることはなかった。スクルフ族は結構ドライなのだ。

「でもまあ、兄さんが居なくなるのはいつもの事だから」

これからの自分の事を心配すればいいのに、コバタさんは心配そうに彼を見上げている私を慰めていた。

「さ、なんとか飛ぶ方法を考えようか」

DJコバタさんはいつだって自分の事を後回しに考えているような人だった。それが短所でもあり、長所でもある。

朝方近くまで航空魔法の本を読んで勉強しなおし、現場監督とラジオDJはいつも通りこなしながら、工員達が帰った後も工場に残り、製図用の巨大な机を前にして図面を引いていた。

油圧式アームで定規を動かす、けっこう大掛かりな机だった。キヤンバスも縦三メートル、横八メートルはある。元々は飛空艇の図面を引くためのものだ。この工場でそこまで規模の大きな製品はもう扱っていないのだけれど、ずっと大切に取ってあったのだ。

そんなあれこれがあって一週間、ラジオに変な手紙が届いた。

「では、次のお便りに参りましょう。おっ、わが町、工場町セオフイールド在住の、RN『飛行アビリティ』さんからのお便りです。DJコバタ、お前の作っている設計図ではダメだ、全然ダメだ。

これはわざとか？ わざと飛行事故を引き起こしたいのか？ いいか、ジトーノは空を飛ぶための魔法を生まれつき身につけているんだ。何もかもを魔石でサポートしてやる必要はない。

そもそもお前、風魔法が何なのかわかって装置に組み込んでいるのか？ 風魔法は要するにベクトルの向きを捻じ曲げる魔法だぞ。邪魔な方向に働く力を分散させるだけでも十分に事足りるのに、なんでわざわざ下向きのベクトルを上に向けるために五つも六つも石を並べる必要がある？ いくらブランクが長いからと言ってジョークもほどほどにしる。

いいか、鳥じゃない、魚のヒレをイメージしろ。ジトーノにとつての翼とは、魚のヒレに近い。これがないと、潮の流れに身を任せ、漂う事は出来ても、自由に泳ぐことが出来ないんだ。」

……えー、飛行アビリティさん、開発チームに入りたいたんだつたら素直にそう言ってください。連絡待ってます」

謎の技師『飛行アビリティ』さんの助言がラジオで公開されると、

リスナーから沢山の意見や問い合わせが寄せられた。

なぜスクールフ兄弟が義翼を開発しているのか、とか、無理せず政府の障害児養護施設に預けるべきだ、とか、アンシエについての事がもっとよく知りたい、だとか。ジペンゼ州の住民たちは、基本的に世話焼きが多くて、私のことはあつという間に話題になってしまったのだ。

この放送があつてからというものの、私達の身の回りがにわかに変化しはじめた。話題を聞きつけて、報道局が工場に押しかけてきた事もある。

工場の敷地内に泥のついたバンで乗り付けて、マイクやら撮影機材やらを担いだクルー達がわらわらとたむろしていた。私の庭に勝手にやってきて、という感じがしてちょっとむっとしていたけれど、人間が結構多かったので恐くて近寄れなかった。

そのとき投影結晶で全国に放送された映像は、工員の一人が録画して今も大事にとつてある。

ツナギを着た白い狼頭のおじさんが、のんびりと立っている。その太ももに、顔をうずめるようにして立っている身長一四七センチぐらいの女の子が映っている。前髪で顔を隠しているのは恥ずかしいからだ。

真っ直ぐ立っていられない感じでもじもじして、無意識のうちに自分のワンピースの裾をぎゅっと掴んでいる。

「この子がアンシエです」コバタさんはカメラに向かって足元の私を紹介した。「私たちはこの子の為に義翼の開発を行っています」

「義翼が完成したら、将来商品化など是可以ののでしょうか？」

工場の敷地内にやってきたテレビクルーの質問に、コバタさんは単純な受け答えをしていた。

どういう経緯で私がこの工場に住んでいるのか、私はいったい何者なのかは、事前に話し合っていたため質問されなかった。

「一刻も早くこの子の翼を取り戻して、そして、同じジトーノと暮らしていけるようにしてあげる事が我々の目標です。そして」

今でも私の記憶に残っているのは、私の頭を優しく撫でているD
Jコバタさんの一言だった。

「一刻も早く、この子を本当の両親の元に帰してあげたいと願っています」

生放送の直後から、報道局には電話が殺到したそうだ。

アーディナル全土からひっきりなしにかかってきて、回線が一時
パンク状態に陥ったほどだった。

後日、工場にやってきた局員に、工員たちが総出で対応していた。
「そんなにですかい？」

「里親になりたい、あの子は私の子だ、という件数だけで八百件近
くある。中には『グレート・マザー』も居る」

「グレート・マザーって？」

「有名人がテレビに出演するたびに『自分の生き別れの子供だ』と
騒いでいるおばさんだよ。この間は自分はリゲルⅡシーライトの母
親だと言っていた」

「リゲルⅡシーライト？」

「憲兵団大佐だよ。ほら、やたら派手好きで最近よくマスコミを騒
がせているあの人大よ」

「憲兵団大佐って？」

工員たちは工場の外の事にはあんまし詳しくなかったけれど、丁
寧にメモを取って対応してくれていた。

本来ならD Jコバタさんが応対していなくちゃならなかったのだ
けれど、そのときコバタさんはお腹に重たい駄々っ子を抱えていた
せいで、それどころではなかったのだ。

取材があつたその日から、私はD Jコバタさんに子猿のようにし
がみついて離れなかった。

今まで不安に思っていた事が形を成して、はつきりと目の前に迫
ってきたせいで、私の感情は砕けてしまったのだ。

本当は私の事を重荷に思っているんですよ。

いつか私を見放すんでしょ。

実際、私と兄弟との間に血のつながりはこれっぽっちもなかった。他所からの借り物だった。言ってみれば、他の工員たちと同じなのだ。お互いにいつも微妙な線引きがあつて、私はただ同じ家に住んでいるだけの女の子でしかなかった。スクルフ兄弟みたいな絆が欲しかった。家に居なくなつても「まあいつもの事だから」で済ませしてしまうぐらいの厚い信頼が欲しかった。

「コバタさん、私を捨てないで……」

「大丈夫、捨てたりしないよ」

私の頭上から降ってくるDJコバタさんの声は、いつもラジオから聞こえてくるのと同じ、強くて優しい声だった。

「私はジトノなんかじゃないの……私は、コバタさんと同じスクルフなの……毛むくじやらの犬で、背中に羽が生えただけの犬なの……十六になつたら、コバタさんと結婚するの、だからお願い、私を捨てないで……」

「ああ、その頃になつて、まだ私の事が好きだったらね」

コバタさんは髪の毛を舐めて落ち着かせてくれた。

この日を境に、コバタさんは一生私の親で居る決意をしたのだそうだ。

その後、いくつがあつた里親の申し出を彼はみんな拒否してしまい、義翼の開発をつづけた。

ジペンゼ州に義翼の開発をしているスクルフ兄弟がいる、という噂は、こうしてたちどころに世間に知れ渡った。

マルハトさんも営業先でその事ばかり質問せめにあつて困つたらしい。どこから様子を伺つていたのかは分からないけれど、いままで謎のリスナー『飛行アビリティ』さんとして影ながら助言を送っていたのが、途中から直接開発チームに加わるようになった。世に言うツンデレというやつらしかつた。

開発チームは八名ほどの工員の有志によって構成されていた。仕

事が終わった後の二時間から三時間ほどを使って開発にいそしんで、彼らが帰ったあとも、二人の兄弟は夜遅くまで工場で粘って、缶コーヒーを飲みながら問題だらけのタイムラインや設計図を睨んであーだこーだと話し合っていた。

私は隅っこの方で毛布に包まって、二人を見ながらずっとここにこしていた。これが私の好きなスクルフ兄弟の姿だった。まだ造船業を撤退して間もなく、会社を軌道に乗せるために徹夜で試行錯誤していた、あの頃の彼らだった。私の記憶の中にある彼らは、本当はこういふ兄弟だった。

「……航空法が昔とはまるで別物になっている事は考えてあるのか」「ああ、その辺は知り合いに詳しい奴がいるからチェックを全部まかせてある」

「それはいいとして、特にまったく進展が見られていないのは機関部の小型化だな。こんな大きさじゃ、あの小さな背中に背負わせるのは無理じゃないか？」

「大丈夫、要はこれから負荷が小さくなるようにすればいいんだ」「可能な限り魔法は使わないよ」

「無茶言わないでくれ、材質的にこれ以上の軽量化は難しいところだよ。フレームだってもう強度より軽さを重視の魔鋼を使ってるし、後は魔法を使ってごりごり負荷を削っていくしか……」

「それをなんとかするのが設計技師の仕事じゃないか……」

そんな風に関係が難航していたとき、冬眠休暇から目覚めたばかりのマツシユ族の工員が飛び込んできて、状況を激変させる一報をもたらした。

「おい、やばいぞ！ まじでやばい！ トラスト社が乗り込んできた！」

二人とも聞き耳をぴんと張り詰めて、顔をこわばらせていた。

「トラスト社が？」

《ジペンゼ・エア・トラスト社》はジペンゼ州の飛空艇製造会社だった。かのドック？世が創始者という、東部でも指折りの超一流企

業である。

飛空艇ではすでにアーディナル大陸全土でトップシェアを誇るメーカーで、大規模な需要の見込めない義翼みたいなニッチ産業に手を出すような事は今までなかったことだ。

「ははあ、要するに企業のイメージアップ戦略ってとこだな」と、マルハトさんは睨んだ。

「イメージアップって？」マッシュ族の工員が不思議そうに尋ねた。「つまり、俺たちの義翼の開発はラジオやテレビで全国的に広く知られている。ということは、今後ラジオ放送でスポンサーの紹介にトラスト社の名前が入れば、連中はそれだけで労せずして大きな宣伝効果が図れるってことだ」

「こっすいなあ……けど、開発援助はほしいよなあ……」

今回は、そのエア・トラスト社が義翼の開発援助を申し出てきたらしい。

コバタさんは頭をかいたけれど、マルハトさんはふんと鼻を鳴らした。

「馬鹿を言え、こっついのを許すと、そのうち向こうが開発に口を挟むようになってくるぞ」

「チーフ、それって一体どういう事なんですか？」

「ああ、向こうの都合でもっと早く完成させるように要求されるってこと。こっちのペースでは作れなくなる」

「それだけじゃ済まないぞ。工房も設備が整っている向こうにそっくり移されて、開発チームも向こうの技術者とウチの工員が全員入れ替えられても文句は言えないって事だ。あり得ない話じゃないぞ。お前がアンシエだったら、そんな風に色んな物を取りこぼしながら作られた義翼を貰って素直に喜べるか？俺達工員が一から作っているからこそ意味があるんだろうが」

DJコバタさんもマッシュ工員もはたと動きを止めて、マルハトさんがマルハトさんでないみたいない目で彼を見ていた。

「なんだその目は……」

「いや、別に……いつそその方が効率いいとか言わないんだなあ、
と思つて」

「ふん、言いそびれたただけだ」

マルハトさんが牙をむいてガルルと唸った声に、しゃがれた陽気な声が重なった。

「がっはっは、邪魔するぜえ！」

見ると、見覚えのないスクルフ族が一人、挨拶もなく設計室に踏み込んできた。

マルハトさんと同じネイビーブルーの体毛だけど、手入れを怠っているのか、似ても似つかないくらいボサボサだ。色ガラスのゴーグルをかけた顔つきは狂犬そのもので、唇がめくれ上がってざらりと並んだ牙をむいている口元は、狼というよりワニに近い。背が低くてずんぐりむっくりした体型のスクルフが、ツナギのポケットに両手を突っ込んで、ぼっさぼさのホウキのような尻尾をあちこちにこすりつけながら、ぶらぶら歩いてくる。

DJコバタさんは初対面だったようで、「誰？」という顔だったけれど、外回りのマルハトさんは顔を見た事があるらしく、声を詰まらせた。

「ドック……？世！」

そう、彼こそが伝説のドック？世の孫、人呼んでドック？世だ。

そのフランクな風貌や立ち振る舞いには偉人の血の影も見当たらないけれど、彼は間違いなく天才の遺伝子を受け継いでいた。

『魔石航空学界きつての異端児』。『ジペンゼが生んだ奇才』。様々な呼び名を持つが、彼の二つ名は必ず『異ノ奇ノ変ノ狂ノ電』のいずれかを含んでいると言われている。この世界でその名を知らぬものは居ない逸材だった。

後々になって、私はその凄さを身をもって知ることになるのだが、このときの私は鼻をつまんで、「なんだかオイル臭い犬がきたなあ」ぐらいにしか思っていなかった。

じっさい彼はついさっき機械いじりをしていたみたいに薄汚れた

身なりをして、尻尾にべつとりついた黒い液体を、その辺の柱に擦り付けていた。とても大企業の重役が交渉をしにきた風には見えなかったのだ。

「お前が開発援助を申し出るとは、一体どういう風の吹き回しだ、トラスト社でも鼻つまみ者だと聞いたが？」マルハトさんは鼻の頭にしわを寄せて、この胡散臭い変人の来訪を本心から警戒していた。どうやら元ライバル企業同士、私怨があるらしい。

「ぐっふっふ、まあ、テレビを観てあんたらのやってる事にちいと興味が沸いたんでな。心配しなくとも、トラスト社の名前を出してもらうつもりはねえよ、これは俺個人の開発援助だ。素直に面白いと思ったから手を貸しに来たのさ」

などと言いつつ、ドック？世は隅っこの私をじろじろと観察していた。私ははつとして毛布を引き寄せ、首をすぼめた。ゴーグル越しだったけど、なんだか居心地の悪い目線を感じたのだ。

私の体をじつと見て、いったい何を考えているのだろうか。

どうやらこの男は私にひどく興味を示しているらしかった。それがどういふ興味なのかはまだ良く分かっていなかったけれど、マッド・サイエンティストという人種が一体どんな連中なのかということ、このときの私はきつと本能的に予感していたのだと思う。

ドック？世はにやにや笑いを始終引っ込める事なく、人差し指を立てて交渉に入った。

「ただし、条件がある」

「待った」

DJコバタさんがすばやく制した。

「まさかお前まで彼女の父親だ、とか言い出すんじゃないだろうな？」

「がっはっは。おいおい、何言ってるやがる？ 機械を生涯の恋人と

誓ったこの俺様だぞ」

豪快に笑うドック？世を、DJコバタさんは不審そうににらみつけていた。

「いいか、どんな条件を提示するつもりだろうと、あの子に指一本触れるような事は私が許さん、それだけは先に理解しておけ」

DJコバタさんが念を押すと、ドック？世は言いたい事を完全に封じられたのか、ただにやにや笑っていた。

「ぐっふっふっふ……」

どうやら私に触れないといけない条件しか考えていなかったらしい。危ないところだった。ドック？世は耳をぶんぶん振ってオイルを飛ばしながら言った。

「がーっ。わーっ。たよ。そう来ると思ってたぜ。じゃあ魔力機関の製作は全面的に俺様にやらせてくれよ。それと素材はこの工房のもんを好きに使わせてくれ、それで手を打とうじゃねえか」

交渉が下手なのか、あるいはこの場合は男気があるというべきなのか。あっという間に下手に出て格安の条件を出してきた。彼の事を怪しんでいたマルハトさんも、かえって驚いたような顔をした。

「そんな疑り深い顔すんじゃねえよ、どうせあんたらも利益度外視でやってんだろ？ それに俺様はエコノミストじゃねえ、アーティストだぜ。タダで環境借りて自分の作りたい物を作られたらそれ…… ああ、じゃあ、そのラジオをちょこっといじらせてくれ」

と、私の抱えている携帯型ラジオを指して言った。

私たちはみんな心配そうに顔を見合わせていた。何か裏がありそうだ。本当に信用して大丈夫なのだろうか。ねえこのくさい犬だれ？ そんな不安に満ちた声ばかりがあがった。

けれどもドック？世はそんな空気など意に介さず、ゴーグルをぎらりと光らせて凶悪な笑みを浮かべたのだった。

「ぐっふっふ、まあ見てなって。魔法に不可能はないって事を証明してやんぜ」

*

ドック？世はそれから工場内をぶらぶらと歩き回って、その辺に落ちていた鉄くずを幾つかと、壁に立てかけてあった大きな歯車と、あと既に作っていた試作品の義翼を持ってこさせ、工房を借りるといつて三日ほどこもりっぱなしになった。

「いいか、誰も覗くんじゃねえ。決して覗くなよ。覗いちゃダメだぞ、わかったな、覗いたら何が起こっても保証しかねるからな、いいな、の、ぞ、く、な、約束だぞ」

まるで覗いて欲しいと言わんばかりの口ぶりで念を押しつつ、鉄の扉を閉じてしまった。

誰も覗くつもりはなかったけれど、朝から晩までズババババというなにげに凄い音が鳴り響いていて、さすがに何をやっているのか気になって仕方なかった。

工員たちも気が散ったせいなのか、ケアレスミスや事故が多くなった。溶鉱炉で指を火傷する事故が一件、落下してきた鉄板で頭を打つ事故が一件、プレス機で尻尾を挟む事故が二件もあった。ちなみにバーリヤ人たちの回復能力は半端ではないので、いずれも翌日には完全に回復していたが。

問題なのは私達が寝るときだった。夜通しその音が鳴り響いていたため、普段から事務所の二階で眠っている私達には、建物を通してその振動が直に伝わってきて、その頃は毎晩変な時間に目が覚めた。

ちなみにスクール族は基本的に地べたで丸まって眠るので、その習慣を受け継いだ私もたいてい床で丸まって眠っていた。

目がさえてしまって身を起こすと、事務所の床で眠っている白い毛の塊が、呼吸にあわせてゆっくり上下していた。

DJコバタさんである。たぶん私の目は十ルクスくらい輝きを増していた。DJコバタさんと一緒に寝るのは久しぶりだった。走り寄っていった、毛の塊に頭からぼふんと突っ込んだ。コバタさんの体毛は石鹸のにおいがして、どこに頭を置いてもふかふかで気持ちよかった。コバタさんはぐると唸って仰向けになり、太い尻尾で

私を包んでくれた。

「ねえ、コバタさん。義翼を作ってもお金にならないって本当？」
疲れていた筈のコバタさんは、私の質問にも律儀に答えてくれた。
「まあ、必要な人はあまりいないだろうからね。スクール用のヘッ
ドホンと一緒に」

「じゃあ、どうしてみんなが作ってくれるの？ どうして一生懸命
になってるの？」

「アンシエは飛びたくないの？」
「……………」

飛びたいかどうかと聞かれて、私は一瞬戸惑った。一瞬恐怖さえ
感じた。

けれども、それは一瞬だけだ。本能が私にこう言えと命じていた。
「飛びたい」

背中寸足らずの羽根がぱたぱたと羽ばたいて、飛びたいと叫ん
でいた。翼を得ることは未知の世界に足を踏み入れる事だった。青
空に住むようになってしまえば、今までのように工場でぬくぬくと
した生活が続ける事はできなくなってしまいかもしれない。けれど
も、それでも、やっぱり私は飛びたい。

コバタさんは人の気持ちを感じ取る不思議な嗅覚を持っていた。
私の頭に顎を乗せて言った。

「そう、私たちも飛びたいんだよ。それで十分なんだ」

そう言っつて、コバタさんは私の頭を押さえつけたまま眠りについ
た。ずばばばという音はいつしか止んでいた。

そんな夜を幾つか過ごして、三日目にとんでもないものが完成し
ていた。

コバタさんが工房の引き戸を開けると、銀色のヘルメットのような
ものが空中にぶっかかり浮かんでいるのを見つけた。

薄い歯車がそれをぐるりと取り囲んでいて、それが定期的に緑色
の魔法のわっかを、シャボン玉みたいにふわっ、ふわっ、と上下に

あつという間に月日が流れて、私は十五になった。

身長は変わらず一四七センチ。前髪は変わらずくしゃくしゃと顔を覆っている。唯一変わったのは、もう『空飛ぶ女の子』になってしまったという事だ。

完成した義翼《ZT-935》は肩帯がついた、リュックサックのように背中に背負うタイプだ。動力機関にはドック？世の開発した最新の魔力機関を搭載している。

操縦機関は工場の皆ががんばって作ってくれた。私の短い背中の羽をすっぽりと包み込んで、羽の微細な動きを感知して舵を切る設計になっていた。

製作の途中で私が背負ってみると、「パプシ（てんとう虫）みたいだな」とマルハトさんに茶化された（あの人は真面目に言ったのだらうけど）ので、そのまま通称^{パプシ}となった。

総重量は二キロに達してしまっただけで、電波塔に並ぶ私のお気に入りだった。

三年、文字で書く短いけれど、けっこう色々な事があった。

町に出かけて買った可愛い白のチュニックを着るようになった。

下にはいているスパッツは空を飛ぶ女の子の味方だ。異論は認めない。

友達も何人が出来たけれど、ジトーノよりもダウンタウンの獣人の方が気の会う子が多かった。たまーに外泊もする。あんまりコバタさんに聞かれたくないこともする。ふらつと家を飛び出して、地中海の終わりパンゼペルカまで一人で遊びに行ったりもする。

それでもラジオだけは肌身離さず、どこにでも持っていた。D Jコバタさんの声を聞くのはセオフィールド住民のお昼の習慣みたいなものだ。風のいい日は日当たりのいい海岸に腰掛けて、羽の手入れをする海鳥の群れに囲まれながら、お気に入りの白のヘッドホ

ンでラジオを聴いていた。

「さて、続きましてはお悩み相談室のコーナーです。魔導師の園テンニデイルコンタル州にお住まいのRN『わんだるふ』さんからお便りいただきました。

『はじめましてDJコバタさん、私はスクルフ族の主婦です。今回は私の娘について相談したい事があります。

今年十五歳になる娘がいるのですが、その子の素行が最近おかしいのです。

派手な化粧や香水をつけるようになって、ブランド物のバッグや高価な指輪を身につけていたり、最近では夜遅くまで家に帰ってこない事もあります。

せめてちゃんと門限には家に帰ってくるように言っているのですが、娘に注意しても放っておいてと言われてしまいます。夫に相談しても返事は放っておけの一言です。

色んな事件が起きる世の中なので、娘の事を思うとどうしても心配でたまりません。DJコバタさん、私はこれからどうしたらいいのでしょうか？ 私は心配性なんでしょうか？」

うーん、親にとってはいつまで経っても子供は子供ですからね。いつまでも子供の身を心配するのは、親として当然の事だと思います。その気持ちは大切でしょう。

ただ、スクルフ族で十五歳と言ったらもういい大人ですからね。結婚適齢期もそろそろ後半です。娘さんのその辺の事情も理解してあげてはどうでしょうか？」

私はラジオを睨んで、むうと唸った。

ちなみに獣人は種族によって体の成熟する速度がまちまちで、スクルフ族はだいたい人間の二倍の早さで大人になると言われている。では私は三十歳か。コバタさんに結婚適齢期の後半と言われてしまった。

私はまだまだ子供のままでいいはずだけど、心はDJコバタさんと同じスクールでありたかった。しょっちゅう家を出て行くのも、もうとつくに独立してもいい年頃だと信じているからだ。そうか、そろそろ結婚適齢期の後半なのか。

私がどんなに遠くに離れても、DJコバタさんの優しい声は変わらず優しかった。それはいつかマルハトさんが居なくなつた時と同様に、私の事も心配しなくなった証拠だった。

そうなのだ、それが私の欲しかったスクール族の絆だった。少し寂しくもあつたけれど、それは私を一人前と認めてくれた証なのだと思う。

カッコいい言い方をすると、それが私の誇りでもあつた。今のつかず離れずの距離感も私のお気に入りなのだ。

「では、リクエスト曲のコーナーに参りましょう。曲目は……」

ぐわしゃっ、と音がして、私のヘッドホンが頭から引き剥がされた。

耳をもぎ取られた人みたいに硬直していると、私の頭上を真っ白い一対の翼が横切つていった。

プラチナブロンドの髪の毛から両肩が覗いていた。翼はその肩甲骨から下に向かって八の字に伸び、腰の辺りでぐぐつと上向きに大きく曲がり、細い腕を目一杯伸ばせるくらい離れた辺りで、下向きの扇のように羽毛を広げている。左右あわせれば、身長の倍ほどもある綺麗な翼だった。

「ゼラちゃん！ 待って、返して！」

私は慌ててそれを追いかけていった。

ゼラは崖から少し離れた辺りで、いつの間にか空に浮かんでいたジトーノのグループと合流した。

振り返つたのもやはりジトーノの女の子だった。なんだかイライラしているみたいだけど可愛いので憎めない。フリルの沢山付いた

ピンクのワンピース、足には可愛いアンクレットを巻いていた。

「へえー、あんた今どきラジオなんか聞いてるんだ」

両端の取り巻きがおなかを抱えてけらけらと笑っていた。見た目に反して中身は本当に意地悪な子たちだった。私はふくれっ面で抗議した。

「もぉーっ、返してよぉーっ！ それ大切なラジオなのぉーっ！」

地中海の終わりパン〓ゼペルカは暖流と還流の合流点で、岬に吹きつける上昇気流を求めてジトーノの若者がよく集まるスポットだった。他の子達は端から見ているだけなのだけど、みんな翼を持たない私がかかわれても見てみぬ振りをしていた。

大人になって分かったことだけど、ジトーノは翼のないジトーノを仲間はずれにする傾向にあるらしい。同じ能力を持った種族にしか分からない違いというものがあるらしくて、私は彼らのグループに入るのに難儀していた。

「なに聞いてんの？ うわー、L I Sじゃん、なつかしー」

「返してよぉー、勝手に聞いてちゃだめえー！」

離れた岬で寝そべっていた男子グループから、笑い声が起こった。お調子者のエジリンがキャップの顎ひもをぶんぶん振って、横じまのシャツをよじつてくねくね変なダンスを踊っていた。

「もぉーっ、ゼラったらぁーっ。いつまで経ってもデレ期が来ないんだからぁー」

エジリンは男子グループの笑いを誘いつつ、女子グループから汚い物を見るような目線を集めるのが得意な男の子だった。どんなグループにも一人はいるタイプだ。

ゼラの表情が石を飲み込んだみたいに、かちん、と固まった。この手のからかわれ方をすると、ゼラは決まって極端に機嫌を悪くするのだった。

今は大事なラジオを持っているのでとつてもまずい。冷や冷やしながから見守っていると、ゼラは肩をわなわなと震わせ、唇の間からぷすぷすと、何か声にならない声を呟きはじめた。

ちなみに、彼女と私の仲が険悪になったのは今にはじまった事ではない。この義翼ができた最初の夏だった。LISを知っている事からも分かる通り、彼女はセオフィールドの近くに住んでいて、デীগ湾周辺を一人でよく飛んでいた。

その頃のゼラは一人ぼつちで、海軍の人に育てられたらしい。冷たいけど本当はとっても優しい子だった。まだ飛ぶのが下手な私の手を取って、地中海をぐるぐる飛び回ってくれたりした。

岬や島の名前をひとつひとつ教えてくれて、帆船のマストに腰掛けて沿岸警備隊の訓練を見学したり、おしゃれな女の子達を見ては羨望の眼差しを送っていた私に、マイクロミニなんて地上の女が履くものよ、と言って笑ってみせたりしていた。

私にとってゼラは女神様だった。彼女が居なければ、私はこれほどまで早く空の世界になじむ事は出来なかつただろう。

けれども、そんな関係も些細な行き違いで不意になってしまふものだ。

思い出すのも恥ずかしい黒歴史だ。岩の上に並んで休んでいるとき、思い切って「友達になつてくれる？」と聞いてみた。

まだどちらにも同い年の友達がいなかった頃、つまりどちらにとつても初めての友達だった。ゼラは確か「別にー」とか「いいけどー」とか気のない返事をしたはずだったけれど、私は初めて出来た同種族の友達を思わず抱きしめたのだった。

そこまでは良かった。ゼラもくすぐつたがっていたけど笑っていいし、そこまでで止めておけば良かった。その時、私はスクルフ族がよくやる《親愛の挨拶》をしてしまった。

犬や狼が人の口を舐めようとする事はよく知っていると思う。あれは彼らが人に敬意を示すための挨拶行為なのだそう。もう大体察しは付くだろうと思うが、スクルフ族のこの挨拶も、それと非常によく似た形式の挨拶だった。というかまんまそれだったのだ。

ゼラの唇はバニラと炭酸ジュースを足したような味がした。しばらく魂が抜けたみたいにはかーんとして、握った手は岩と同化した

みたいに硬くなっていた。

私にとっては単なる挨拶程度でも、ゼラにとって、それはものすごく大切な事だったのだ。人が実際に目の前で爆発するのを、私はじめて見た。爆発するってああいうのを言うんだと知った。

同じ獣人でも挨拶の仕方を間違えるとんでもない事になる、そう教えてくれたのはコバタさんだった。そういうハプニングに関する投稿がLISでも一番多かったので、私もじゅうぶん分かっていくつもりだった。けれども、身の回りに居た工員はみんな大人だから、私の粗相を笑って許してくれていたのだ。私はその意味の重大性を、この時になるまで漠然としか理解していなかった。

ボロボロの泥まみれ、土まみれ、泣きじゃくって帰ってきた私にDJコバタさんは情けなさそうに耳をぺたりと伏せながら言った。

「相手の機嫌を損ねたときは、自分の何が悪かったのかよく考えてごらん。それからその事を謝って、何がいけなかったのかをちゃんと話し合ってごらん」

正論が好きなのはやっぱり兄弟だ。

話そうにも、ゼラは超不機嫌で私と目を合わせてもくれなかった。私は何がいけなかったのか分からないまま二年を過ごし、去年の冬、このままではいけないと思い立ち、とにかく謝ろうと誠心誠意を尽くした。

友達とたむろしている所に押しかけて行って、ごめんねごめんねと何度も謝った。ゼラは相変わらずむっつりして私の話を聞こうとはしてくれなかった。何がいけなかったのか私が理解していなかったのだから当然だ。ちなみにファーストなんとかだったらしい。謝るときもまた口を舐める習性があって、セカンドなんともついい私がいちいちでしゃまって、私が真相を知ったときにはもう修復不可能な関係になってしまった、そしてそのまま現在に至る。

男子グループに茶化されたゼラはあの時みたいに激昂しており、空中で地団駄を踏んだ。

「デレ期なんか永遠に来るかーっ！　ちくしょーっ！　お前なんか、

んつと弾くように私を勢いよく弾き飛ばした。《ワルゼルベタの紋章》はエルフが使っていた直径十メートルの大きな魔法陣だ。陶磁のような鮮やかな蔓模様が生まれて、いつ見ても美しかった。

ちなみに、そのときの私のパプシはいつの間にかドック？世による余計なチューンナップが施されていて、補助ブースターから赤い火を噴いてマツハ三まで出せるようになっていた。

今までそんな速度を出した事はなかったけれど、ラジオに必死だった私はそんな事を気にしている場合ではなかった。崖の先端から真っ青な海上に身を躍らせた私は、すでに音速にまで達していた。

一面に広がる雲海が飛ぶように足元を過ぎ去っていった。崖はとつくに遠ざかって霞みの向こうに消えていた。

正面の風圧を分散するのを怠れば、空気の壁と衝突事故を起こしてしまう速度だ。そもそも呼吸が満足に出来ない。私はかなり無茶をして叫んだ。

「ゼラあああつ！ 待ってええええええええええつ！」

あつという間にゼラのプラチナブロンドの髪を視野に捕らえて、彼女が振り返ったその一瞬の表情を確認した。

「きゃあああああああつ！ 来ないでええええええええええつ！」

ゼラは夜道で恐ろしいものに追いかけられたような顔をして逃げ出した。大きく右に左に旋回しながら追跡を振り切ろうとするゼラを、パプシのブースターが火を噴いて角度を調整しながらぐんぐん追い上げていく。

「待ってよおおつ！」

「た、助けてええええええええええつ！ 誰か、助けてええええええええええつ！ 助けを求められてしまった。やばい、意外とシヨックだ。けれど仲間たちは既に遙か遠くに消えていたので、彼女の声は仲間の誰にも届かなかつただろう。」

じたばたもがくゼラの姿がどんどん大きくなって、もうすぐその羽に手が届くというとき、彼女は向かい風をめいっばい受け止めるように翼を垂直に立てて、ぶわつと浮かび上がった。

進行方向からほぼ直角に上に舞い上がるのは、けっこう高難易度の飛行技術だった。それはパプシにとつても同じことで、一旦補助ブースターをすべて停止させなくてはならない。肩甲骨同士をくっつけるように羽を縮めると、背中 of 歯車が互い違いに回転してぴたりと重なり、歯がぼつぼつと最後の火を噴いて直進を止めた。次に進行方向を定めなくてはならない。私は慣性に従って真つ直ぐ飛びながら、両足を蹴り上げて真上を向いた。空を昇ってゆくセラに向かって仰ぐような姿勢に切り替わった直後、私の頭上を何か細いコードにつながれたものがかすめていった。長年見慣れてきたその形状は、一瞬見ただけですぐに分かってしまった。

「……ラジオ！」

ラジオはヘッドホンと一緒にくるくる円を描き、雲の隙間で一瞬きらりと光って、高度千メートルから海に落ちていった。ラジオもドッグ？世がなにやら魔改造していたけれど、ここから落ちて無事なほど耐久性を高めてくれたかまでは知らなかった。

私の目標はすぐさまラジオに切り替わった。勢いに任せてぐるっと一回転し、真下に顔の向きを変え、ぼんつ、という音を立ててもうひとつ特大の魔法陣を発生させながら急降下した。

周囲の雲が円形に吹き飛ばされ、風圧で一瞬のけぞって、首がぐきつと鳴った。……ちよつと慌てすぎた。意識を集中させて、どうにか空気抵抗を微風を感じるぐらいにぎゅつと絞り込んだ。

ラジオはカモメの群れの中をすり通り抜けて、紺碧の海に向かって落ちていった。まだ間に合う距離だった。前方右下に見えた白いヘッドホンに向かって急降下し、なんとか手を伸ばして掴み取ってみると、ヘッドホンだけだった。

「うそつ、やだ！」

コードの先にラジオ本体がついていなかった。

必死になって目を凝らしても、海上には紺碧の波間しか見えなかった。仰向けに飛びながら先ほどのカモメの群れに目を凝らしても、それらしきものは見えない。焦って前方不注意のまま海上を突っ走

ついていた私は、その時ぐうぜん海上を通過していた大型船の甲板に盛大に突っ込んだ。

ずぼーん

分厚い甲板を私が景気よく突き破った音だ。

真下の室内をごろごろと転がって、何か硬い金属のようなものに踵をぶつけ、ごきんつ、という音と共に止まった。あまりの痛さに数秒のあいだ手足を捻じ曲げて悶え、そして仰向けにばったりと倒れた。

もういやだ。十五になってもこういう飛行事故はたまに起こしたその度にスクールフ兄弟に迷惑をかけたばなしだったけれど、今回事故った相手は、私が今まで事故った相手の中で、まさに人生史上、最悪の相手だった。

甲板に突っ込む直前、黒塗りのごつい船体が一瞬見えたので、ヤクザの車ではないがそれによく似た嫌な気配はしていた。ああ、これはまずい相手だな、という予感があった。

しばらくその格好でへばっていると、私の足が何か冷たい金属質の物を蹴っているのに気がついた。

ばんざいをした格好で首をごろりと曲げてみると、それは砲台だった。先ほど踵を打ちつけたものの正体がこれだ。どうやらここは戦艦の、砲甲板と呼ばれる場所のようだ。湾曲した壁には大砲の先端を突き出すのにちょうどいい窓があつて、船と併走しているカモメが一羽見えた。

恐る恐る首をめぐらすと、放甲板の中央には、兵士と思しき鎧を身にまとった人々が沢山集っていた。

兵士、である。分厚い全身鎧に身を包んで、肌が一箇所も見えない。顔も無表情な鉄仮面に覆われていて、十字型のスリットの隙間からこつちを見ている。どうやら私は、どこかの軍艦に突っ込んでしまったらしいのだった。

それだけならまだ良かった。もし、彼らが連合軍の海軍だったら、むろん事故つたらまずい相手には変わりないんだけど、今の状態ほど恐くは無かった。ジトーノの不良グループは海軍に結構補導されていたりするし、疲れた時には船に乗せてもらったりするので、知り合いが居る可能性もあったのだ。

けれども、彼らに共通しているある要素が、この船に私の知り合いが一人もいない事を物語っていた。

なぜか、彼らは全員、帝国兵の格好をしていたのだ。

帝国兵。昔アーディナル全土を侵略したという敵国の兵士たちである。

耳を澄ませばぶるるるというスクリューの回転音がして、煙突からは煙がもくもくと昇っていた。一世紀以上も昔に廃れた蒸気機関をいまだに使っている国は、世界広しと言えどそうそうないはずだ。

要するに、ここは敵の船の中だった。

「……あの、これって……帝国の船？」

「……」

「……」

「ヤップ（そうだ）」

言葉が、通じなかった。

「はは、はは……」

私は、力なく笑った。この場をなんとか笑って切り抜けようと、無駄な努力をした訳ではない、笑っていられるうちに笑っておけ、と、そう開き直ったのだ。

帝国兵たちを見てみると、たまに鎧の中身は空っぽなんじゃないかと思う事があった。何を言っても文句の一つも言われぬし、叩いても蹴つてもびくともしない。

本当は鎧の中に生身の体なんか無くて、甲冑が意思を宿して歩いているのではないか。そんな不気味な雰囲気すら漂わせていた。

千人も乗船できそうな広い装甲船の狭い一室に、私は見張りの兵士と一緒に閉じ込められてしまった。

兵士は私にはまるで興味がなさそうで、つまらない役を押し付けられた事を不満に思いつつ、本棚から適当に本を選んで読んでいた。「ねえ、なんで貴方たちって、いつもそんな格好してるの？」

見張りの兵士は私のいちばん嫌いなタイプだった。無口で、そのくせ態度が尊大だった。鎧の上からマントをつけているので、階級は他の兵士より高そうだ。この船の千人隊長にはウラジミールという名前で呼ばれていたけれど、例の如く鎧の中身は全く見えない。

「海に落ちたら溺れちゃわない？ それ以前にあっついよねえ今日、脱いじゃわない？」

もとより返事がもらえろとは思っていない。話し相手が欲しくてしつこく話しかけていたら、その見張りは椅子と本を持って外に移動してしまった。

後を追うように窓から顔をのぞかせても、船楼の窓からはただっぴろい甲板と、黒煙を吹く太い煙突が一本見えるだけだった。

見上げると、マストの上の見張りが強烈な太陽光を反射していた。とてつもなく暇だった。

「アンシエ、なにやってんのこのドジ！ バカ！ 変態！ 天然飛行犬！」

海に面した丸い窓の向こうから、セラがここぞとばかりに言いたい事をぶちまけながら顔をのぞかせた。心細さの極地に追い込まれ

ていた私は、思わぬ知り合いの出現に涙目になって駆け寄った。

「ゼラあゝっ。びあああっ」

心強い味方は私の舐め癖をとことん警戒していて、両手で私の肩を押しつけてしゃちほこばった。

「まっつて、落ち着け、あんたはその気でも私そんな趣味ないんだからっ」

「何を言ってるのか分かんないよお、それよりもお願いラジオかえして、あれがないと死んじゃうよおお」

「うるさい、わかったわよ、ほれほれ」

ゼラは白いラジオのストラップをつまんで、ビーフジャーキーみたいに私の頭上にぶらぶらゆらして見せた。不覚にも私がビーフジャーキーをぶら下げられた犬のようにラジオを追っている隙に、ゼラは甲板室の内部に身を滑り込ませ、絨毯の弾力を踏んで確かめ、すかさず内装を値踏みした。

壁には重苦しい装丁の本ばかりの本棚があり、狩りの獲物を自慢するかのようには熊の毛皮や、サメの顎の骨などが飾られていた。滑らかな黒壇の机があって、角には目立つように三つ四つぐらいの勳章が飾られていた。船長クラスの人が使う部屋のようなのである。壁に飾られている海図には私たちの住むアーディナル大陸の近海と、周辺の島がいくつかが描かれている。地名が少し古い。

「なによこれ……優遇されてんじゃん。……てっきり物陰にフナムシとか密航者が潜んでいそうな薄暗い船倉にでも閉じ込められてるのかと思っただわ」

「それ私も思っただけど……なんか水夫さんたちが縁起が悪いとか言っつて騒いでたから、途中で部屋が変わったの」

「ああ、それ聞いたことある。たしか帝国が信仰している勝利の女神様は、黄金の翼を持った女の人、つまりジトノだったらしいのよ。空を飛ぶ鳥が好きなのね」

「へえー、ゼラちゃん、物知りい」

「向こうの世界には有翼人がいないのかしらね。なんでも戦時中に

山岳地方に生息していたジトーノを発見した帝国兵が、村をまるごと向こうの世界に連れて帰っちゃったとか」

「うへええ、私、向こうの世界に連れてかれちゃうのおお」

ちよつと家出をしてパンゼベルカの岬でラジオを聞いていただけの私には、当然、異世界に連れて行かれるほどの心構えは出来ていなかった。

帝国兵が信心深いなどと聞いた事がないけれど、この船が停戦から今日までなかった尋常でない作戦の最中なのは明らかだった。重要な任務で緊張していた兵士たちの目に、偶然船に飛び込んできた私の姿はどのように映っただろう。なんせ勝利をもたらす女神様なのである。

シヨックを受けている私にゼラは「あんたは大丈夫よ、翼の生えた犬でしょ」とか気休めとも言えない冗談を言っつてにやりと笑い、手ぐしで髪を整え、おいしい獲物を狙う狐の目つきになった。

「いいじゃん、この船のセレブになれて。で、どう？」

「どうつて何のこと？」

「ここだけの話、いい男いる？」

「みんな仮面かぶつてて顔わかんないし、ご飯は非常食みたいなパンとライムだけだよ」

「あつそ、じゃあこんな所にいるだけ時間の無駄ね。さつさと逃げましょ、ほら」

「うーん、そ、それが……」

私はパプシの肩帯をぎゅつと掴んで、円形の窓をじとつと覗んだ。私の義翼は、ゼラのような折りたたみ自在の翼とは違って、硬い歯車を背負っている。どんな角度に傾けても、歯車がつつかえて窓を潜れそうになかったのだ。

「うわああ、ん、なんで余計な機能は沢山あるくせにこんな時に役立つ機能はないのよお。十六段階ギアだとかヘルスメーターだとかGPSだとか私全然要らないつてのにい。こんなんだから？世つてバカにされるのよお、あの犬うう」

「あ、アンシエ、落ち着け。物に当たるな、本をばら撒くな、熊を殴るな。GPSって何？」

「詳しい事は分ないけど、なんか、月との距離を測ってどこに居るかがわかる機能だと言ってた。あと魔法の地図と情報のやり取りをして、それでパプシの居る場所が地図にうつるらしくって、小さい頃迷子になった時によくそれで探してもらってたんだけど、今はもう面倒だし倉庫でほこり被って……あ」

はっと閃いた。今もその魔法の地図でパプシの居場所が分かるのなら、コバタさんたちに迎えに来てもらえばいいのではないか。

「何、そのニンマリ顔。ひよつとして帝国軍の船に単身乗り込んで娘を助けに来るスーパーヒーローに心当たりがあるわけ？」

「こ、コバタさんならそのくらいやってくれるもん！」

「殺すつもりか、どんだけ信頼が厚いんだ……えー、つうか、あんたひよつとしてDJコバタの知り合いなんだ？」

「うん、私のお父さんなの」

えへんと胸を張って言うと、ゼラは諸手を打って、何か素敵なドツキリを仕掛けられたような顔をして頬を赤く染めた。ジペンゼ州にはDJコバタさんのファンが結構多かったのだけれど、その種族が何であるのか、ファンの間でも様々な議論が飛び交って謎とされてきたのだ。

「スクール族なんだけどね」

「おいおい、私の夢をピンポイントで破壊するなよ……。わかった、困ったときの沿岸警備隊にでも連絡してみよつか。ヒゲ親父の知り合いがいるのよ、何かあったら電話よこせて名刺くれたんだー」

さすが、だてに悪い子をしていないゼラである。ポケットから携帯を取り出して目にも留まらぬ高速連打で操作し、しばらく耳にあてがった。けれども繋がらないらしくて、すぐに、ちつと舌打ちする。

「圏外かよ……そっぴんぱんぜルカってM波塔が少ないんだよなあ。じゃあ、ちよつくら陸地まで戻ってきます。がんばって生きる

よ

「ゼラあゝ、ごめん置いてかないで私をひとりぼっちにしないでえゝ」

「おいおい、泣くなよタリいな。……よし、分かった、一回だけデレてやる。一生に一度のサービスだ。だから勘違いするなよ、本当に私はそんな趣味はないんだからな？」

船室から外に出たゼラは窓枠に両手を乗せて、呼吸を整えること数度、きりつと眉を尖らせた。

「あ、アンシエ、お前、空を飛ぶときだけ綺麗な碧眼がむきだしになるんだけどさ、その、意外と可愛くて、び、びっくりしたぞっ」
言い切ったゼラは、頬にちゅつとキスをした。なぜか照れたように顔を赤くして、ばっさばっさと飛んでいった。

いまのは何だったのか。何がサービスだったのか。展開がよく飲み込めなくてぼんやりしていた私の手に、ラジオの硬い感触だけが残されていた。

一般の通信機に使われている魔力・七五〇系統は、他の魔力の抵抗を受けにくいいため理論上はどんな遠くへも飛んでゆくものだったが、通信機として使うために、特定の魔石の配置に反応して音を出すようにしているため、自然界の魔力が偶然似たような配置を持っていると抵抗を受けてしまい、遠くに行けば行くほど磨り減って徐々に聞こえづらくなってしまふ。

それを克服したのがマルチタック式波性魔力信号（通称M波）で、石の配置を自然界にほとんど存在しない虚数配置というものにして、さらに同じ虚数配置でも同じ波長のものにしか反応しないようにしてあるため、理論上はどんなに遠くでも抵抗を受けずに通信ができるものらしい。

けれども便利すぎるM波の通信網は国が管理していて、通信台の設置にかなりの手間と費用がかかる。使っているのは主に国营放送のラジオやテレビや電話局くらいで、私たちがよく使う携帯は製造コストを抑えるために信号をあらかじめ弱いものにしてあった。ア

ーディナルのあちこちにあるM波塔を仲介してM波通信をする仕組みになっていて、ダンジョンに入ったり強烈な魔力のミストが立ち込めたり、あるいはM波塔から五キロ以上離れただけでたちまち使い物にならなくなってしまうのだった。

スクルフ兄弟が作ったアマチュア・ラジオ塔は、一体どのくらい遠くまで信号を飛ばしているのだろうか？ はたと気になった。全国放送しているとは聴いたけれど。急に不安になって、その辺にしゃがんでラジオを耳にあてがった。

さっきの岬でも十分に音が聞こえたので、ここからでもまだ大丈夫なはずだった。じつと耳を澄ましていると、やがていつも通り、DJコバタさんの優しい声が鮮明に聞こえはじめた。

「さーて、続いているお便りは、錬金術師の聖地グランコルーフにお住まいのRN『九十九児の母』さんから。」

『はじめましてDJコバタさん。今回は混み入った事情の話があつてお手紙を出します。』

私はアナトー族（カエルの獣人です）の主婦です。優しい夫とも仲がよく、先月、おなかを痛めて生んだ九十九個の卵も無事に孵化し、一〇一人の大家族でこの冬を乗り切り、春から理想の家庭を築いていこうとしておりました。

けれどもそんな矢先に、夫婦仲がとつぜん危機に陥る事件がおきたのです……。

病院で遺伝子を調べてみた結果、九十九匹の子供のうち五十八匹が夫の遺伝子を受け継いでいない、赤の他人の子供であることが判明しました。つまり、私が結婚する以前に関係を持った男との間に生まれた子だったのです。

さらに詳しく調べてみると、なんと！ 私の遺伝子も受け継いでいない、母親の異なる子供が四十四匹も紛れていたのです！

どうやら二十四匹は出産のときに病院の手違いで卵を取り違えてしまったらしいとの事。残り二十四匹は夫の遺伝子しか受け継いでい

ない子供だと分かったのです！

どうして「夫の遺伝子しか受け継いでいない子供」が紛れているのか不思議に思い、夫に問い詰めてみると、どうやら夫が以前雌だった時（アマトール族は環境に応じて性転換するそうです）に私と同じような経緯で身ごもった子供だったらしく、「自分がお腹を痛めて生んだ子供なので、どうにかして育てたかった、悪気は無かった」と言っ、私の卵にこっそり自分の卵を紛れ込ませた事を素直に白状しました。

計算上、私の遺伝子のみを受け継いだ子供は九十九匹中たったの三十八匹という事になります。私と今の夫との間に生まれた子供はわずか十七匹でした……。

現在、取り違えられた二十匹の子供はうち二匹に親が見つかった今は十八匹。代わりに私と夫の本当の子が五匹もどってきて二十二匹。父親のわからない私の子が計算上は三十八匹。父親のわからない夫の子が新たに二十三匹見つかって四十七匹。計一二四匹の子供が我が家において、以前より増えてこんがらがり、もう誰が誰の子やらさっぱりという状態です。

……DJコバタさん、私たち夫婦はこれから一体どうしたらよいのでしょうか？」

結論、もうみんなまとめて愛しちゃいなヨー！」

私は笑った。とにかく笑って、やがて泣き笑いになって、抑えきれなくなっ、てぐじぐじ泣いた。

「コバタさん、帰りたいたいよう……ひぐっ」

時に責任という言葉は可哀想な子犬や異国の船の姿をして十五歳の女の子を途方にくれさせるものだった。自分から家を出しておいて無責任な、と自分でも思うのだけれど、世の中には自分ひとりの責任で背負いきれない物なんていくらでもあるのだった。

ぐじぐじ泣いていると、見張りのウラジミールがやってきた。脇に抱えていた毛布を、投げる位置も考えずにぞんざいに投げてよこ

した。

「くれるの？」

甲冑に身を包んだウラジミールは何も言わなかった。鎧を構成している部品のひとつひとつにポリウムがあつて、ふんわりとした花卉のように重なって陰影を生んでいる。ところどころ隙間から黒い肌着が見えていたけれど、肌はどこからも見えなかった。

毛布の端を持って細かく眺めていると、ウラジミールはさつさと部屋からひっこんでいった。

「あ、ありがとう」

人見知りをせずにちゃんとお礼を言った。えらい。私にしてはとても珍しい事だった。ウラジミールはしばらく戸口に立ち止まって、何か言いたげに振り返った。

「女の立ち話は本人が思っている以上に周囲に聞こえているぞ、覚えておけ」

うぐ、と喉が詰まった。どうやらさつきとゼラとの会話は部屋の外まで聞こえていたようだ。

十字のスリットが刻まれた仮面越しに脅すような、けれども半分からかうような声が聞こえた。

「言っておくが、俺はげん担ぎに拘るような腑抜けではないのだ。お前が我々に勝利をもたらしてくれる女神だなどは微塵も思っていない。だが俺の部下達はその限りではないのでな……」

ウラジミールはどうしても言っておきたかったらしいその点を嫌みつたらしく付け加えて、さらに戸口を指で指して言った。

「命が惜しければ早々に立ち去る事だ、たとえ逃げても撃ち落すような真似はしないでらう。俺もこんなお守り役からとっと開放されたい気分なんだ。逃げたいだらう、ん？」

ウラジミールの隣で、戸口はぽっかりと青空をのぞかせて完全に開いていた。

けれどももこいつに促されてそこからそこそ出て行くのは途轍もなく癪な気がした。なんとというか、虫唾が走る。私は「ちよつとそ

「ごどいてくれる？」と言う代わりにちよつときつい目線を送ってやっていた。ウラジミールは私の毛布を指差して、感情のこもっていない声で続けた。

「泣きたいならその毛布に包まっっている……声を漏らすな、耳障りだ」

頭がかあつと熱くなつた。何なんだこいつは。無口かと思つていたら、喋りだしたら一言も二言も多い奴だつた。なんだかむかむかしてきて、私はウラジミールの背中に毛布を投げつけてやった。ドアのところまでは届かず、足元にはふつと広がっただけだつた。

ぷーつと膨らんで、耳を洗うつもりでラジオに耳を傾けた。けれどもラジオは国営の緊急ニュースに切り替わつていて、DJコバタさんの声は聞こえなかつた。M波はたまにこういうのがあるから困る。

うあーと唸つて、その辺に大の字に寝転がった。照明用の小さなシャンデリアはこのまま顔面に落ちてくるのが恐いくらいゆらゆら揺れていて、木の床板がやけに大きく、ぎしぎしと傾いていた。

手にしっかりと握つたラジオが、平坦な声で台風情報を伝えていた。

「……南海で発生した大型台風はヨビ諸島南西沖を北上し、現在アディンゴ州、クルスループ州の一部で発達した雨雲による集中豪雨が観測されています。台風はこのまま進路を東に変えて沖合いを通過していくものと見られています。沿岸地域ではその後も大型の波が押し寄せてくるものと思われ、引き続き避難勧告が……」

この台風の事を、あの冷血漢ウラジミールではなく、千人隊長にでも伝えてさえいれば、あるいはあの恐るべき事件を未然に防ぐことができたかもしれない。

きつと伝えたところで、私の意見など聞く耳もたなかつたかもしれないけれども、私の存在の重要性をこの後、連中に嫌というほど

思い知らせてやることは出来たはずだった。

*

その晩、大型台風は見事に船の進路と重なり、私は床の上をごろごろと転がっていた。

ぐわーっと口を開けたサメの頭の前に行ったり、がおーっと襲い掛かってきそうな熊の毛皮の前に行ったり、わああああと叫ぶ私の手の中で、ラジオの国営放送が延々と緊急ニュースを告げていた。

船はあさつての方向に流されないように碇を降ろしていた。船全体がぎりぎり、みしみしみ、という嫌な軋みをあげて私の神経を逆なでした。

窓の外は食器洗浄器みたいな土砂降りで、甲板にいたウラジミールはさすがに室内に戻ってきたけれど、この状況で信じられない事に、室内で椅子に座って平然と本を読みはじめた。絶対酔う。適度に開かれた膝をわっしわっしと搦んで、本の上に身をぐいと乗り出した。

「ウラジミール！ 大変、朝食を戻しそう！」

「夕食と昼食はもう吐いたのか？」

「あんなカロリーの低いおやつ、食事のうちにも入らないもん！」

てかなんで私の言うこと聞いてくれないのよっ！ 台風くるかもってあれほど言ったじゃない！」

「軍隊で通用する言語は『かも』ではない、『いる』のみだ」

「はあ？ 意味わかんないっ！ ひよっとして私の事バカにしてる？！」

「あの時点で確認できたのは、『羽の生えたチビが台風がくるかもしれないと騒いでいる』という事実だけだ、そんなもののためにわざわざ腰を上げるとんだ笑いものになる」

「あれ？ 今、ひよっとして私の事チビって言った？ チビって言ったの？ むっかああああーっ！ 私の身長は一四八（！）センチ

チよおーっ！ それを言っているのは二五八センチのコバタさんだ
けなのおーっ！」

私は猟犬のごとくウラジミールに殴りかかったけれど、分厚い鎧
はびっくりするぐらい頑丈な素材で出来ていて、裸足で蹴っても素
手で殴ってもびくともしない。フライパンなんかを想定していた私
は反対に手足を痛めてしまった。

基本的に行動原理が犬な私は次に歯をたててみたけれど、ウラジ
ミールは横に向いて私のよだれが本に付くのをかわしたただだった。
そんな一方的な攻防を繰り返している内に、嵐の中でも辛うじて聞
き分けられる鐘の音が響いた。部屋の外で、嵐の中を誰かがあわた
だしく動き回っているらしかった。

「何の音？」

「警鐘だ、どうせ魔物か何かが出たのだろう」

ウラジミールはなんだか他人事のような言い草だった。実際この
男にとっては海の魔物など、他の兵士が処置するべき他人事でしか
ないのだろう。

驚いて声の出なかった私は、この男の全身をもう一度じっくり観
察した。つま先から頭の天辺まで嫌いなタイプだった。なんて嫌な
奴だ。嫌味の塊だ。けれど、彼の大仰な態度は、通信管から聞こえ
てきた次の一声で掻き消えた。

「海賊が出現したっ！ 戦闘員は直ちに戦闘態勢に入れ！」

帝国船の通信管は、金属製のパイプが壁つたいに船室同士を繋い
でいるだけの原始的なものだった。

わんわんと聞こえづらいその声を聞いた瞬間、ウラジミールは本
をばんと閉じた。

「……海賊って何？」

窓の外が雷光で一瞬明るくなり、そこに奇妙な光景が見えた。

空を覆い尽くす雲の中央に、空を走る人影がうつりこんでいたの
だ。

ウラジミールが突然立ち上がって、彼の腕にしがみついていた私

は部屋の反対側まで弾き飛ばされた。

「いったあ〜！」

私はごろごろと床を転がって、黒檀の机に背中をぶつけていた。腹立ち紛れに勲章を手当たり次第につかんで投げつけてやった。

しかし、ウラジミールは私の事など眼中に無いらしい。ウラジミールが本棚に向かって乱暴に本を投げつけると、何かの魔法を使ったのか、本はページも開かず綺麗な形を保ったまま、真っ直ぐ他の本と本の隙間に収まった。

船が恐ろしいくらいの急角度に傾いて行っただけで、そのまま彼は甲板側を見渡せる窓の脇へぱりついていた。手足を突っ張ってトカゲのように窓の外をうかがっている。彼の隣に立っていた椅子があまりの角度に耐え切れずにぱたりと倒れても、本棚の本が数冊落ちて、まだ様子を伺っていた。

甲板が見えるのはあその窓だけだ、私は四つん這いになって床をよじ登っていったけど、またごろごろと転がっていった。仕方ないので途中からパプシで軽く飛んでいった。適当な掴まる物がなかったのでウラジミールの腕にしがみついたのだけれど、私が恐がっているみたいで途轍もなく不本意だった。

丸い窓からは荒波に洗われる甲板が見渡せた。その中央部に左右に分かれた人垣が出来ていて、人垣も波を被ってイモ洗い状態で並んでいた。

片方は五十人あまりの鎧を着た帝国兵たち、もう片方は僅か十三名の鎧を着ていない、恐らくは海賊と呼ばれる者たちだった。

「《船幽霊》どもだ……」

彼の仮面のスリットの奥に、不安げに揺れる瞳が浮かんでいた。

私は何をそんなに恐れているのか不思議だった。

たった十数名。装備も貧弱、数の上でも圧倒的に不利な海賊たち。みな上半身が裸で、シダの葉を編んだ腰みのを身に付けているといった風情だった。

暗闇に溶け込みそうな暗褐色の肌をむきだしにしている、目を凝

らせば一人一人の身体の特徴がはつきりと見て取れるようだ。全員がひよるひよるとして細い。全員が正方形の巨大なお面を顔につけていて、顔だけは分からないようにしてある。

四角いお面の目玉のような図形をぎよろりと真正面に向け、海賊たちは横一線にならんで帝国兵たちとにらみ合っていた。帝国兵たちがぎつちりと統制された、隙の無い隊列を組んでいるのとは対照的に、くだらだと、その辺で自由にたむろしている様子だった。

あるとき突然、ヒヒのような雄たけびをあげてびよんびよん跳びはねた。

はっはっはっ、はっはっはっ、はっはっはっはっはっはっはっはっはっ！

体をぐいっとひねって剣を掲げて、ぴたりと同じ角度で腕を引き絞り、片足でびよんびよん飛び跳ねながら甲板をぐるぐる横に移動しはじめた。

掛け声もアップテンポだ。なんだか分からないけど妙にドキドキした。

帝国兵と海賊の戦い方は完全に静と動で、ぴしりと整列した帝国兵は、彼らの戦いの踊りを前にして微動だにしなかった。列を成して踊っていた海賊たちは、とつぜん端の方から蜂の羽音みたいな音をたてて掻き消えた。

ぶつうんと言う音がした。消えたという表現がぴったりくる、何の前触れもなく、すごい速さで帝国兵たちに飛び掛っていったのだ。私には見えなかった短剣による攻撃を、けれども兵士は両手剣でがっちりを受け止めていた。端のほうから順に火花がずばずばと散った。

海賊たちの速さがすごければ、それに瞬間的に反応してのけた帝国兵たちの動きもすごかった。

対応の遅れた約一名が、甲板から海賊に鷹のようにさらわれていったのを見た。私の目は丸窓に限界までくっついて、その行く先を

見送った。窓から消えたので、次々と隣の窓に飛び移って姿を探すと、海に面した窓で二人を見つけた。上空でぴよんと跳んだ海賊が、捕まえた兵士の背中に両足でどすんと蹴りをいれ、そのまま真下に蹴落としているのを目撃した。

兵士が落ちていった先は荒れ狂う海だ。あつというまに甲冑は波にもまれて見えなくなつた。やっぱりあの装備では泳ぎにくいだろう。海賊の方は長い足を蹴って翼もないのに空を飛んで、甲板の方へ再び舞い戻っていた。翼の代わりに強靱な脚力を使い、空気をぼんぼんと蹴ってジグザグに空を進んでいるのだ。

風魔法だ。

見た目は全く別物だけれど、彼らが使っているのは根本的にジトノと同じ原理の魔法だった。

体をひねり、足で空を蹴り、風魔法を放って、立体的な空間移動をしているのだ。

戦闘に目を凝らしてみると、海賊たちは力で勝る帝国兵たちを速さで翻弄していた。直角移動や一八〇度ターンを多用して、これは当たったと思われるようなタイミングの反撃でさえすり抜けて、かすりもしない。

これは本来ジトノにとってタブーとされている風魔法の使い方だった。せっかく前方に突進する推力を魔法で得たのに、それを完全に打ち消すために余計に膨大な魔力を消費してしまう。非常に効率が悪く、長時間飛行するには全く適さない技術なのだ。

「ウラジミールさん、こちらからは攻撃しないで！」

その弱点に気づいた私は、気づくとウラジミールの方に飛んでいた。ただ熱心に窓の外を見続けているウラジミールの腕を揺すって呼びかけていた。

「お願い、なるべく時間を稼いで！ 風魔法はあんな使い方をしちやダメなの、彼らは長時間空を飛ぶ事が出来ない、そのうちすぐにバテてしまうわ！」

どうして帝国兵に助言を与えようとしているのか、こうなったら

乗りかかった船だとか、そんな後ろ向きな思いはこれっぽっちも含まれていなかった。たぶん私の思考回路はもつと単純に働いていて、船が襲われているのなら、それを黙って見過ごすわけにはいかなかったのだと思う。

けれども、ウラジミールは強引に腕を振り解いて、凄まじい気迫で言い募った。

「戦争に口を挟むな、小娘が」彼は厳しい口調で切って捨てた。「我々の作戦に口を挟んでいいのは上官か、さもなければその作戦が失敗したときに腹を切る覚悟のある奴だけだ。そのどちらにも属さない者は黙って見ている」

普段から怒られた事のなかった私は、その気迫を目の当たりにして、胃が縮こまる思いをした。ちよっぴり涙がにじんだ。

彼らはコバタさんとは違う、本物の兵士だった。私なんかには言われなくとも、すでにそうするつもりだったのだ。帝国兵たちは短い戦いの中で敵の性質を確実に把握し、徐々に戦い方を変えてゆき、やがて反撃のコツを完全に掴もうとしていた。

「最大防御を取れ！ 攻撃は中止！ 敵の動きが鈍くなるのを待て！」

巨大な両手剣を片手で振り回しながら、嵐の中で千人隊長が檄を飛ばしていた。

「敵の攻撃力はさほどない、陣形を死守しろ！ 背後を庇いあえ！」この悪天候の中で、抜きん出た状況把握能力だ。

こうなると後は早い、凍った世界からやってきた兵士たち、耐え忍ぶのは得意中の得意だった。

ウラジミールは船室の壁に取り付けられたパイプにすがりつくとも、蓋を開けた。その通信管からも壮絶な金属音が漏れてきた。戦火が広がっているのは甲板だけではなかった。どうやら船内でも繰り広げられているらしい。

「こちらウラジミール、機関部、そちらの戦況を報告しろ！」

「こちら機関部、外の廊下で数名と応戦している！」

「応援が必要か！」

「いいえ必要ありません、嵐が過ぎるまで持ちこたえてみせます！」
「……いえ、そいつは無理な相談です！」

横から誰かの焦ったような声が聞こえた。はっと息を呑む声が聞こえた。肌に冷たい気配を感じて、見ると、船の進行方向には、先ほどは無かった黒い影が二つ、壁のように無言で立ちはだかつていた。

「碇が断たれている！」

この海域は彼らの縄張りだ。岩礁のある場所も、潮の流れもすべて把握済みだったのだ。

「くそつ、甲板の海賊達はただのおとりだ！」

「まずい、岩礁に吸い寄せられているぞ！」

かんかんかんという警鐘が船員達を急かし、通信管から悲鳴に近い声が振り絞られた。「面舵一杯！」とか、「全速後進！」とかの指示が聞こえたけれど、巨大帆船は怠惰なゾウみたいのにのろのろと前進し続け、その指示通りに動いてくれそうな気配はなかった。

「くそつ、アーディナルの悪夢か……！」

迫り来る岩陰がベツラ・キニヤのジェラートのお化けに見えたこととは覚えているのだが、それ以降は何も覚えていない。船底ががりがりつと削れるような鈍い音がして、船が持ち上げられたような衝撃があった。本棚から大量の本が降って来て、直後に世界が暗転した。

*

気づくと背中を湿った森の風が撫でていて、私は無人島の真ん中で目を覚ました。どうやってこんな所にたどり着いたのか分からない、岩の上の、スポンジみたいな苔のベッドにうつぶせになっていた。周りにもこもこふわふわした緑色の鞠に囲まれている。頭のとっぺんに小さな花の咲いたそいつらが、四方八方からもそもそと私

の体をついばんでいた。

髪の毛をもしゃもしゃ齧って、わきの下やふくらはぎや足の裏の硬いところをぺちゃぺちゃ舐めていた。他のやつに踏まれた一匹がころころころと秋虫のような声で騒いでいた。

よく見ると人懐っこい細い目と、猫みたい小さな口があつて、至る方向から私を味見している最中であるらしかった。なんか食べられてるなあ、と感じてのっそり体を起こすと、生きているとは思わなかったのか、きゅーきゅー鳴いて森の奥へ逃げていった。

教会にピンク色がいるが、こいつらはその亜種なのか。はたまた無人島生活を送るうちに全身苔むしてワイルドになっただけなのか。もし後者だとしても、せいぜい経験値一から二になった程度だろう。こいつらも教会のと同様に、全く害はなさそうだった。

私の翼、パプシは壊れていた。泥の付いた胴体からウィーンと変なモーター音が聞こえていて、へし折れた歯車が意味もなくぐるぐる回っている。ぶんすか、ぶんすか、と排煙のように魔法陣を生み出し続けているのを見て、魔力系統がやられているらしい事が分かった。きつと私が森の奥までぶっ飛ばされたのもこいつが暴走したせいだ。

これまでも事故つた時に何度か自力で修理した事があるが、ここまで壊れるとちゃんとした工房でなければ修復は難しいだろう。密林をさ迷い歩いて、とにかく海岸に出てみようと思った。サバイバルの知識なんて何一つ持ち合わせていなかった、上手くすれば人いる場所を見つけられるかもしれないと思ったのだ。

台風一過の森はひどい有様だった。湿った木の枝を踏み砕いて、じゅくじゅくした苔の絨毯に足を取られながらも進むと、あの帝国兵達が車座を組んでいるのに出くわした。

ベソをかいて歩いていた私は、はっとして涙を払い、その辺の木陰に隠れた。

ちょうど彼らの向こうに小さな入り江が見え、そこに帆船らしき物の姿も見えた。砂浜に船のへさきだけが立っていて、鷲の像が真

つ直ぐに空を向いて、ますます勇ましく見える。この様子によると、岩礁にぶつかつた拍子に船は大破してしまつたようだ。

「狩人スキルを持つたものは？」

仮面をしているとといった誰の発言がよく分からない。十名近くいた兵士達の中で、ほぼ全員が手を挙げて、ますます分からなくなつた。

帝国軍には何千通りものスキルがあつて、兵士達は正確にその型通りに動く技術が要求されるらしい。

「工船スキルを持つたものは？」

こちらはマイナーな能力なのか、手を挙げたのは一名きりだ。それでも誰が発言したのかはやっぱり分からなかつた。

遭難者となつた帝国兵たちは、どうやらこの島からの脱出方法を探っている最中のようなのだつた。

「地図によれば、この周辺にはこと同じような小島が大小あわせて二十ほどあり、その間に入り組んだ海流が流れているようだ。…連合の目から隠れるのに十分な広さを持っていると見ていい。先ほどのスキルの者がいれば、食糧の確保もさほど難しくはないだろう」

「最大の問題は」角つき兜の兵士が、のっそりとした動きで腕を組み替えた。「どのようにして連合に見つからずに元の世界まで戻るか、だ」

全員が仮面で頭部をすっぽりと覆っていて、誰の表情も読み取ることが出来なかつた。彼らの話し合いはまるでパントマイムのように見える。誰が喋っているかは身振りで判断するしかない。

兵士達の中に見覚えのあるマントがあつた。ウラジミールだ。巨木を背にした連中の中でも、真ん中の一番偉そうな位置にいる彼は、聞き覚えのある嫌に強気な声を発した。

「我々の船の残骸が連合に発見される可能性も含めて考慮しなくてはなるまい。連合は警戒を強めて海上の警備を強化するはずだ。もしそれらに海上で遭遇した場合、現在の我々の戦力では到底太刀打

ちできない。無力化され、敵国の捕虜にされるのは目に見えている」
意外と冷静な判断である。仮面越しにも、兵士達の浮かない表情が見て取れた。私は木陰からちよこつと身を乗り出して、沈んでいる兵士たちの様子を伺うことにした。

「もしこのまま連合の捕虜になるような事態が起これば、祖国では敵に情報を漏らした売国奴として我々だけではない、我が部隊そのものが非難される事になるだろう。」

もしここで脱出を諦め、この場で自決したい者がいるならば、私は何も見なかったことにする。手を上げろ」

何を言っているのだろう。自決など、そんな事するのはウラジミール一人で十分だ。

いったい誰が手を挙げるものか、と思ったけれど、驚いた事に多少のとまどいのもと、全員手をあげてしまった。他の人の目を気にしているとも言うのだろうか。帝国の兵士たちは、時に命よりも個人としての面目を保つ事を何よりも大事にする生き物だという。ウラジミールが脇に提げていた美しい小刀を、左脇の兵士に差し出した。ごくりと唾を飲む音が聞こえた。

「曹長、お前からだ」

「だ、ダメーっ！ やめてーっ！」

隠れていなければと思ったけれど、こんな時になりふり構ってられない。というか、ここはウラジミールの横暴をとにかく止めなければと思ったのだった。

私が叫んで飛び出しても、兵士たちは大して驚いた様子は見せなかった。どうやら索敵スキルというものがあつたらしく、木陰から覗いていた私の存在は、先ほどから彼らにずっと知れ渡っていたらしい。経験値二の魔物よろしく無視されていただけだった。

小刀を首筋にあてがって躊躇している曹長にしがみついて、わめき散らしたり叩いたりしながら色々阻止していると、ウラジミールが怒りを押し殺したような声で言った。

「我々の戦争に口出しするなと言ったはずだぞ、チビ」

「チビって呼ぶなって言ったはずよ！ この冷血漢！ なによあな
たたち、辛さに耐えて生きているより、死んだ方がカッコいいとで
も思ってるんだ！？」

「覚悟を決めた男を非難するな、名誉を取り戻すにはこうするしか
ない」

「バツカじゃないの！？ ちょっと失敗したぐらいで死ぬなんて、
そんなのが名誉だなんて絶対おかしいわ、あんまりよ！」

「ちよつとの失敗だと？ 我々の失敗の責務は、お前が想像してい
る失敗とは比較にならないほど重いものだ」

「私の想像を勝手に決めつけないでよ、あんたに何が分かるってい
うの？！」

「いいか、この任務を達成する為だけに既に大勢が命を落としてい
る。彼らの命によって繋げられた任務を受け継いだ我々が、己の命
を惜しむ為に任務を放棄することを選択しようとしている。それで
名誉が今までどおり保てると思うのはよほどの厚顔だ」

「何よ任務、任務って！ コバタさんが言ってたよ、あなたたちは
どんなに辛くても生きなきゃダメだって！ それが生き物の任務じ
ゃない！ しっかりしてよ、もうちよつとの辛抱よ、あと少しぐら
い頑張れないの？ もうじきここに助けが来るんだから！」

言い争いをしているうちに、黙ってうつむいていた兵士達が、次
第に私の方に顔を向けはじめた。私は背中のパプシを自慢げに彼ら
に見せてやった。

「ほら見て、私のこのパプシ、GPS機能がついてるの！ これで
世界中のどこに居ても私の位置が分かるのよ！ ゼラちゃんが沿岸
警備隊の人に連絡して、私を迎えに寄越してくれるって言ってたか
ら、もうすぐこの島までお迎えがやってくるはずよ！ もうすぐこ
こに連合軍がやってくるんだから！ 安心して、みんなもう少しの
辛抱なんだから！」

その連合軍に捕まりたくないからこうしているのだ、という
彼らの根本的な悩みをまるで理解していない私なのだった。

ともあれ、連合軍が接近しているという情報を聞いた兵士たちは、全員弾かれたように顔を上げていた。

私はまるでそれが自分の手柄であるかのように得意になっていた。本当はぜんぶ他力本願で、私は偶然パプシを背負っていただけなのだけれど。

木の根元からウラジミールが腰を上げて、私の肩をがちりと掴んだ。ちよつと痛くて身をよじった。彼は驚きと感動の混じった、気後れしたような声で言った。

「素晴らしい……こいつは本当に、我々の勝利の女神なのかもしれんぞ……！」

*

数時間後、私は沿岸警備隊の巡視船『ウォーター・クラフト号』に乗せられ、無事に群島の森を脱出していた。

はじめて入った巡視船の操舵室は、ゴーグルの中みたいに横に平べったく、塵一つ落ちていない清潔ぶりだった。きつと厳しい上官に鍛えられた船員たちが、毎日丁寧に掃除しているのだろう。前方のガラス窓からの眺めは爽快で、視界もじゅうぶん広く保たれている。

ゼラの言っていたヒゲのおじさん、三等准尉が自ら舵を取っていた。白いベレー帽の奥に緊迫した瞳を隠し、ぱりつとした白い軍服を着た、五十過ぎの口ひげの特徴的なおじさんだ。

操舵室にはこの船長の他に、私と、あと数名の帝国兵もいた。と言っても、今は誰が誰だかわからない。帝国兵たちは今は全身鎧を着ておらず、代わりに鉛色の強化金属の鎧を身にまとして、連合軍の小銃を構えて、出入り口の付近にずらりと並んでいた。

連合軍がやってくると聞いた後の兵士たちの行動は実に迅速だった。群島の奥の大型船が容易に通れない島にパプシごと私を移動させ、そこにこのこやってきた海兵たちから装備を強奪したのだ。

その際にウラジミールが海を潜ってウォーター・クラフト号に単独で侵入し、この船長を人質にして船を占領し、残りの兵士たちを乗せて無人島を脱出した。シージャックだ。本当に、どうしてこうなった？

黒髪から海水を滴らせたウラジミールは色白で、まるで口ウを塗ったお化けのようだった。海水に濡れたブギオというナイフを、無線機を握る船長の首筋に押し当てていた。

「こちらウォーター・クラフト号、少女の身柄を確認した。命に別状はなさそうだ」

『了解、速やかに本土へ帰還せよ』

群島の周辺を哨戒していた海軍の船は、引き続き帝国船の搜索を続けていた。

群島を取り囲むように並んだ大型軍艦の、ウォーター・クラフト号の為だけに空けられた隙間を通って、船は難なく海へとすべり出ていった。

准尉によると、ふつうは女の子が帝国の船に連れて行かれたというゼラの通報だけで、海軍がここまで大騒ぎすることは珍しいらしい。

軍はそんな曖昧な証言だけで動くほど単純ではないし、なにより予算も潤沢ではない。不審船の取締りや通報の内容確認など、そういった些事は本来沿岸警備隊が受け持つ仕事である。

捜査に乗り出した沿岸警備隊は、ゼラが通報してくれた昨夜、GPS情報でパプシが嵐の海上に長時間留まっていた事などから、『未確認の船が海上に居て、少女はそれに乗っている可能性が高い』というはつきりとした証拠を掴んだ。

なので准尉も上官にそのように通達し、調査に向かう事を報告したところ、なぜか上からは海軍との合同作戦を行うように指示されたのだそうだ。

どうやら連合軍は他にも帝国船の目撃情報を受けていたらしく、

可能性のある全ての海域で警戒を強めていた最中らしかった。

このとき、ゼラの帝国船の目撃情報もあわせて報告していれば、まず間違いない。海軍もこの船だけで私の救助に向かわせるような油断は決してしなかったかもしれない。けれども准尉はあえてそれをしなかった。

「歳は取りたくないものだな」

准尉は五十いくばくの壮年の顔に、疲れた表情を浮かべていた。

「ウォーター・クラフト号も生半可な海賊に負けないぐらいの武装もしているし、それに海難救助は迅速さが命だ。君はゼラの大切な友達みたいだからね。何とか早く助けてあげたかったのだけれど……」

「余計なことしないでよ。ゼラちゃんに嫌われてるよ、私」

「喧嘩するほど仲がいい、と言うね。古い言葉しか知らなくて申し訳ないけど。ゼラは仲間がらみの事で私の所に来ることは何度もあったけれど、今回みたいに必死になるのを見たのははじめてだったよ」

准尉はしわしわの手で私の頭を撫でた。ちびっ子扱いしないで欲しい。

「昨晚、嵐で船が出せなかった間、もの凄い剣幕で罵られてね。本当は彼女に追い立てられるように出て来てしまったんだ。それでも自信はあったんだがね。やれやれ、しかしこうもあっさり船を奪われてしまうとは。すっかり平和ボケしてしまったようだ」

と、反省の色を浮かべた准尉は、帽子を目深に被りなおした。

シー・ジャックされた船は、そのまま軍艦に怪しまれる事もなく群島から脱出し、海軍の警戒水域からも抜け出した。

ウラジミールは操舵室の片隅に座り込んでいる私と船長の所にやってきて、老人の方を底冷えのするような目で見下ろしながら言った。

「軍用通信機を出せ」

彼の注文に、准尉はベレー帽の下の眉根を寄せた。軍用通信機は連合軍の主要機関にしか通じない、特殊なM波を使っているものだ。「……何をやる気だ？」

「大戦を多少なり知っている海兵ならば、もう少し利口な対応をすべきだと思うがな」

私はウラジミールの冷酷な顔を下から睨み返した。いちいち腹を立てるだけ無駄だと分かっているのだけど、こいつはどうも許せなかった。

訝しそうにしながら、准尉はよろよろと立ち上がった。

計器パネルの脇に上下の二箇所に鍵がかけられた透明な箱があった。准尉はポケットの鍵を使って蓋を開き、嚴重に保管された大型無線機を取り出した。

「連れて行け」

用済みになった准尉は、ウラジミールの指示ひとつで部屋から連れ出された。

「船倉に閉じ込めるだけだ」准尉の後を追っていた私の頭を、ウラジミールは大きな手でがっちり掴んだ。「勝利の女神、向こうの世界に着いたらお前にはもうひと働きしてもらおうからな？」

ウラジミールは薄気味悪く笑った。その発言に込められた意味に、何かぞつとするものを感じた。なんでこんな陰険な男の言いなりにならなければならないのだろうか。パプシは奪われるし、嫌な笑い方をするし、呼び方はころころ変わるし、口は臭いし、何もかも、腹が立って仕方がなかった。

こうして船員たちは全員船倉に閉じ込められ、操舵室には計器パネルの上にとっかかりとブーツの足を組んでいるウラジミールと、すでに特殊部隊の装備を解いて帝国兵の姿に戻っていた兵士たちだけになった。

無線機をしげしげと眺めていたウラジミールは、なぜか使い方を知っているらしく、迷わず番号を押して携帯のように耳にあてがっ

た。

「こちら《大鴉》^{レイウン}、三二五 六一、《偉大なる狩人》^{グレート・ハンター}の応答願う」

「……用件を言え」

「我々は現在、連合軍沿岸警備隊の保有する海上巡視船ウォーター・クラフト号に乗船し、ヨビ諸島北部をパンゼルカに向けて北上している。船の位置はそちらで確認できるか」

「……確認している」

「霧の向こうの世界に帰還するために、足の付かない船が必要だ。定員は約十名、女の子が一人、指定する海上に至急寄越してほしい」

「……了解した、一時間以内に調達する。……健闘を祈る」

ウラジミールは無線を切って、にやけ顔を海上に向けた。

上手くいきそうだ、という会心の笑みだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7248y/>

アンシェ・アンシール = アルシカのラジオ

2011年11月21日20時06分発行